

平成24年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究

高齢者ボランティアによる社会参加や生涯学習活動における継続支援プログラムの開発

調査研究報告書

平成25年3月

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター

東京都健康長寿医療センター研究所

社会参加と地域保健研究チーム

はじめに

近年、高齢者の家族形態において高齢者のみ世帯が半数を占める。よって高齢者の社会的ネットワーク(以降、ネットワークと称す)を促進・充実させるには、社会参加活動を通して家族外にもネットワークを拡大することが重要である。従来、ネットワークは閉じこもり、社会的孤立、更には孤立死の予防といったネガティブな側面から論じられることが多かったが、最近では健常で活動的な高齢者においても趣味やボランティアサークルを通しての交流により相互の安否・健康状態の定期的な確認や、抑うつ予防など安全・安心な生活への効果が期待されている。

これまでの高齢者のネットワークに関する研究の大半はその関連要因の解明や予後を分析した観察型研究である。これらの研究の知見からは「ネットワークが豊かなことは心身の健康に好影響を与える」といった総論的な結論を得ることはできる。

しかしながら、現在の高齢者を取り巻く家族外のネットワーク環境は重層的かつ流動的であり、これら総論的知見だけをもとに実践的かつ望ましい社会活動の姿を提案することは困難である。例えば、一人の高齢者が趣味やボランティアサークルなどの自主グループ活動に参加している場合、メンバーの高齢化に伴い自主グループとしての活動の継続が困難になる場合、また、新規メンバーが多数入会することで活動の主旨・方向性やインセンティブにおいて差が生じ、集合離散を繰り返すといった場合が散見される。

従って、今後は高齢者の自主グループ活動を動的(ダイナミズム)にとらえ、その意義や効果を論じる必要がある。こうした自主グループのダイナミズムが高齢者個人のクオリティオブ・ライフや心身の健康におよぼす影響を把握するには介入研究が効果的であるが、わが国ではこの種の研究は例を見ない。

自主グループが継続される必須条件は、第一に熟慮された組織形態や運営管理体制といったグループを団体ととらえて望ましい支援のあり方を探索することである。

一方、各自主グループの構成員は高齢者個人々人である。よって、第二には自主グループの継続には高齢者メンバー個人々人が可能な限り長期間、活動を継続できるような個人々人への支援も重要となる。加齢にともない様々な健康障害や認知機能障害を発症するリスクが高まる。例えば、これらの健康障害や認知機能の低下に伴いボランティアや社会参加活動の継続が困難となり、徐々に社会的役割を喪失する高齢者ボランティアも少なくないと考えられる。

そこで当研究チームでは、平成 22 年より、加齢により身体・認知機能の衰え始めた高齢者ボランティアに対する活動の継続と円滑な引退のための包括的な支援策を検討する調査研究を進めている。その中で、身体・認知機能障害により活動継続に困難を感じていると思われる高齢者ボランティア(以下、継続困難者)へのインタビュー調査の結果、継続困難者自身およびボランティア仲間の「老い」に対するイメージと知識が活動継続の可否に影響を与えている事が明らかになった。

これらを踏まえ、身体・認知機能の低下がみられる高齢者にもボランティア活動をはじめとする社会参加活動の継続が重要であると考え、そのための支援策を提示することを目的としている。そこで、当研究チームのこれまでの様々な介入研究や大規模縦断研究の成果を踏まえ、第一に、高齢者ボランティア間の相互支援を高めるための研修プログラムを開発し、その効果を検討した。第二に、高齢者ボランティアの社会参加活動やコミュニケーションを実際の活動現場でモニタリングし、評価するためのチェックリストを開発、検証した。

本研究成果は、生涯学習、福祉、保健領域等の高齢者ボランティアや自主グループの継続的な活動を支援するすべての実践家に、役立つものと確信する。

平成 25 年 3 月

東京都長寿医療センター研究所社会参加と地域保健研究チーム研究部長 藤原佳典

内 容

第1章 研究の課題と目的.....	1
第1節 背景と課題.....	1
第2節 本研究の目的.....	3
第2章 研修プログラムの開発.....	5
第1節 研究概要と方法.....	5
第2節 研究結果と分析.....	10
第1項 研究1. 予備調査と研修プログラムの開発.....	10
第2項 研究2. 研修の実施.....	13
第3項 研究3. 研修効果検討のためのアンケート調査.....	17
第4項 研究4. 研修プログラム改善のためのインタビュー調査.....	25
第3節 考察.....	28
第3章 簡便なボランティア活動の質の維持・向上に資する評価指標の開発.....	31
第1節 研究の概要.....	31
第2節 研究の方法.....	33
第3節 調査結果.....	40
第1項 研究1.....	40
第2項 研究2.....	42
第3項 研究3.....	45
第4節 まとめ.....	46

第1章 研究の課題と目的

第1節 背景と課題

1. 諸言

急速に少子高齢化が進むわが国においては、高齢者の社会参加・貢献活動が注目され、高齢者による多彩なボランティア活動がおこなわれている。ボランティア活動は、Lawton¹⁾により体系化された人間の7つの活動能力水準のなかでも最も高次の「社会的役割」、および認知や判断能力を含む「知的能動性」を賦活するものである。趣味活動や自主グループ等の社会参加活動は知的好奇心や余暇活動を含む「知的能動性」を主とするものであるが、ボランティア活動はさらに創造的リーダーシップや利他的行動と言った「社会的役割」をも含むことで、高齢者が活動を通して達成感や生きがいをもつことに寄与する。

更に、地域高齢者の追跡研究においても、「社会的役割」と「知的能動性」に関わる能力の低下が日常生活の維持に必要な「手段的自立」障害の予知因子であることが報告されており、ボランティア活動の健康面および介護予防への効果が指摘されている²⁾。また、高齢者によるボランティア活動は、地域生活における安心・安全性が問われる近年では、世代間の信頼維持³⁾やコミュニティの潜在力⁴⁾を高めることにも寄与する。

このような高齢者ボランティアを活用することの効果に着目し、当研究チームは平成16年から厚生労働科学研究費補助金・長寿科学総合研究事業「高齢者の社会参加・社会貢献の増進に向けた介入研究」等の助成を受け、60歳以上の高齢者ボランティアによる地域の小学校や幼稚園・保育園の児童を対象とした絵本の読み聞かせを通じた世代間交流プログラム“REPRINTS”⁵⁾⁶⁾を開発し、その活動を支援してきた。“REPRINTS”は「社会的役割」と「知的能動性」を伴う社会活動が高齢者の健康増進に寄与するという先行研究に基づき²⁾、ボランティア活動を「社会的役割」の一つとみなし高齢者のヘルスプロモーションプログラムとしても位置付けられる。「りぷりんと」は上記、“REPRINTS”プログラムにより誕生した任意ボランティア団体の名称である。

2. 加齢に伴う健康障害によるボランティア活動継続の困難

高齢者は加齢にともない様々な健康障害や認知機能障害を発症するリスクが高まる。例えば、大塚(2001)の推計では、高齢者の認知症の発症率は60代で1.9%であるが、年齢と共に増加し75歳以上では8.8%、そして80代では18.1%にまで増加する⁷⁾。これらの健康障害や認知機能の低下に伴いボランティアや社会参加活動の継続が困難となり、徐々に社会的役割を喪失する高齢者ボランティアも少なくない⁸⁾と考える。

しかし、これまでの高齢者ボランティアに関する研究は、より多くの健康な高齢者ボランティアを集める方法に主眼が置かれている⁸⁾。また、ボランティア活動の高齢者自身の健康への効果について総括されているが⁹⁾、ボランティア活動に伴う身体・認知機能の衰えへの対応のあり方や、継続を支援する方法については十分に検討されていない。

そこで当研究チームは、加齢により身体・認知機能の衰え始めた高齢者ボランティアに対する活動の継続と円滑な引退のための包括的な支援策を検討する調査研究を平成22年より進めている¹⁰⁾。高齢者ボランティア受入れ学校施設へのインタビュー調査により、多くの学校施設担当者が子どもたちへ多様な「老い」の姿を提示するためにも、身体・認知機能障害を有し始めた高齢者ボランティアの活動継続を希望していた。一方で、身体・認知機能障害により活動継続に困難を感じていると思われる高齢者ボランティア(以下、継続困難者)へのインタビュー調査の結果、継続困難者自身およびボランティア仲間の「老い」に対するイメージと知識が活

動継続の可否に影響を与えている事が明らかになった。例えば、継続困難者およびボランティア仲間が「古い」とそれに伴う様々な障害を受容し、ボランティア間での相互支援がおこなわれている場合は活動継続が可能となっていた。一方で、継続困難者自身が「古い」を受容できない場合は、老いゆく自身を児童やボランティア仲間に見せられることを躊躇したり、他のボランティア仲間の負担となることを危惧するなどにより、早期に引退していった。さらに、継続困難者が活動継続を希望している場合でも、ボランティア仲間から支援を受けられないと感じている場合は継続が困難となっていた¹⁰⁾。そこで、継続困難者およびボランティア仲間が「古い」を受容し、それに伴う身体・認知機能障害に対する正しい知識を持ち、ボランティア間で継続のための相互支援をおこなうことが重要と考える。

3. グレーゾーン高齢者の社会参加活動の機会の不足

加齢に伴い身体・認知機能が衰えはじめ、健常高齢者と同レベルの活動は困難となりつつあるが、介護保険サービスを利用するほどには低下していない、介護予防における二次予防対象者に代表される所謂グレーゾーン高齢者が地域には多くいると考える。そして、これらのグレーゾーン高齢者の社会参加の機会が限られていることが課題となっている。例えば、当研究チームが実施した「りぷりん」とボランティアを対象とした包括的な支援策を検討する研究調査では、継続困難者がボランティア活動を引退した場合に、自身の心身のレベルや嗜好に即して「社会的役割」や「知的能動性」を維持できる、次なる活動場所を見つけることが容易ではないことが示された。

地域には、介護保険サービスにより提供されるデイサービス、自治体や地域包括支援センターが主催する多様な高齢者の自主活動やサロンがあるが、継続困難者は、これらの場をより重度の身体・認知低下者がいく場とみなし、その利用について否定的なイメージを持っていた。継続困難者は、やや難易度を落としても「社会的役割」を持つ活動を希望し続ける傾向がみられた。こうした志向は、継続困難者の自尊感情や自己効力感を維持する上でも重要である。

加えて、継続困難者の多くは生活機能調査や認知機能検査といった客観的な指標による評価でも、介護保険サービスの利用対象外となることが予測される。つまり、現状では「社会的役割」をもった活動を志向する継続困難者のニーズを充足しつつ、身体・認知機能レベルに即して活動できる受け皿が十分に整備されていない。したがって、継続困難者がボランティア活動から引退した後でも、本人の身体・認知機能レベルとその嗜好に則した社会的役割を伴う社会参加の機会やプログラムを提供することが求められる。

4. 身体・認知機能維持および高齢者のQOL向上のための社会参加活動継続の重要性

当研究チームは身体・認知機能の低下がみられる場合でも、高齢者ボランティア自身やボランティア仲間の支援・工夫および簡便なプログラムに変更する等の活動内容の工夫により、ある程度は継続することが可能であると考える。

その理由の一つは、高齢者の健康の維持および悪化の遅延である。例えば、認知症の前駆段階である軽度認知障害(MCI)のレベルにおいては、記憶障害を代表とする何らかの認知機能障害は有するが、日常生活はほぼ通常通りに維持される。MCIから認知症の診断がつくレベルへ低下するまでに一般的には5年から10年の期間がある¹¹⁾(認知症予防マニュアル)。社会参加活動や人との交流による認知機能維持の効果が先行研究¹²⁾で報告されていることを鑑み、MCIレベルにおいても「社会的役割」や「知的能動性」を伴う活動を継続することが認知機能の低下抑制に寄与すると考える。さらに、38.5%のMCI高齢者が、5年後に正常な認知機能

へ回復するとの報告もあり¹³⁾、認知機能維持・低下予防活動の重要性が注目されている。また、様々な健康障害等の結果として閉じこもり状態に陥らないようにすることも重要である。閉じこもりは死亡率と関連があり、その予防の重要性が指摘されている¹⁴⁾。

5. 高齢者の社会参加活動を評定する方法

継続困難者でも実行可能なプログラムとして、学校や保育園・幼稚園などでの事前練習や実行機能を要する絵本の読み聞かせに比べ、過去の経験を再活用できる昔遊びや手遊びを用いた子どもとの交流活動が有効であると考えられる。しかし、ボランティア活動では、そのサービスの受け手であるクライアントのニーズに一致した質の高い活動を提供することも重要である。したがって、身体・認知機能が低下しつつある継続困難者であっても一定の質を保った活動を提供していく必要がある。

質の高い社会参加活動やコミュニケーションが行われているかをモニタリングするためには、それを測定するツールが必要である。とりわけ、身体・認知機能が低下しつつある高齢者の社会参加活動を評価するには、施設職員や対象者への制約や負担が少なく日常の自然な社会参加活動を客観的に評価するためのツールが求められる。そこで、申請者らは行動観察尺度に注目した。

高齢者の社会参加活動を評価した行動観察尺度としては、高齢者と若い世代との世代間交流場面を想定した尺度が開発されている(例えば、Newman and Onawola, 1989¹⁵⁾; 村山, 2011¹⁶⁾)。世代間交流は、「異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えること」¹⁷⁾と定義されており、子どもだけではなく、青年や施設スタッフと高齢者との交流も、幅広い意味で世代間交流と捉えることができる。

ただし、従来の行動観察尺度は研究者向けに開発されたものであり、施設職員やスタッフが容易に使用することは難しい。そのため、高齢者ボランティアの活動の質を客観的に評価するとともに、コミュニケーションのあり方を評定することができる簡便なチェックリストを開発することが求められる。チェックリストの開発は、社会参加活動やコミュニケーションの質を評価するだけでなく、効果的なプログラムの開発にもつながることが期待される。

第2節 本研究の目的

これらを踏まえ、身体・認知機能の低下がみられる高齢者にもボランティア活動をはじめとする社会参加活動の継続が重要であると考え、そのための支援策を提示することを目的としている。そこで、当研究チームのこれまでの研究成果¹⁰⁾を踏まえ、第一に、高齢者ボランティア間の相互支援を高めるための研修プログラムを開発し、その効果を検討した(第2章)。第二に、高齢者ボランティアの社会参加活動やコミュニケーションを実際の活動現場でモニタリングし、評価するためのチェックリストを開発、検証した(第3章)。

引用文献

- 1) Lawton MP. "Assessing the Competence of Older People". in Research Planning Action for the Elderly: The Power and Potential of Social Science. Edited by Kent DP, Kastenbaum RJ, & Sherwood S. Behavioral Publications. 1972.
- 2) Fujiwara Y, et al. "Longitudinal Changes in Higher -Level Functional Capacity of an Older Population Living in Japanese Urban Community". Arch Gerontol Geriatr. 2003. 36:141-153.
- 3) 柴田博. 日本型「生きがい」とは何か. 8割以上の老人は自立している. 東京:ビジネス社. 2002:25-41.
- 4) Fried LP, et al. "Building Communities that Promote Successful Aging". West J Med. 1997. 167:216-219.
- 5) 藤原佳典、他:都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果. 日本公衆衛生雑誌 2006;53:702-714
- 6) 藤原佳典、他:児童の高齢者イメージに影響を及ぼす要因.“REPRINTS”ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析から. 日本公衆衛生雑誌 2007;54:615-625
- 7) 大塚敏男:日本における認知症性老人数の将来推計、平成9年の「将来推計人口」をもとに. 日精協誌 20:65-69,. 2001
- 8) Hong, Song-lee, et al. "Engaging Older Adults in Volunteering: Conceptualizing and Measuring Institutional Capacity." Nonprofit and Voluntary Sector Quarterly. 2009. 38:200-219.
- 9) 藤原佳典、他. ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響:地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義. 日本公衆衛生雑誌 2005;52:293-307.
- 10) 野中久美子、他. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討—多様な高齢者との世代間交流プログラムに向けての支援策の提言—. 日本世代間交流学会誌. 2013;1:19-33.
- 11) 厚生労働省. 認知症予防・支援マニュアル 平成21年3月.
- 12) Fratiglioni L, et al. "Influence of Social Network on Occurrence of Dementia; a Community-Based Longitudinal Study. The Lancet. 2000.355:1315-1319
- 13) Ishikawa T, et al. A longitudinal study regarding conversion from mild memory impairment to dementia in a Japanese community. International Journal of Geriatric Psychiatry. 2006. 21(2):134-139.
- 14) 新開省二、他. 地域高齢者における“タイプ別”閉じこもりの出現頻度とその特徴. 日本公衆衛生雑誌. 2005. 52(6):443-455.
- 15) Newman, S., & Ward, C. (1993). An observational study of intergenerational activities and behavior change in dementing elders at adult day care centers, *International Aging and Human Development*, 36, 4, 253-265.
- 16) 村山陽、他:日本版世代間交流行動尺度の作成, 日本世代間交流学会誌, 2010, 1(1): 27-37.
- 17) 草野篤子. 世代間理論構築のための序説とその歴史. 草野篤子・金田利子・間野百子・柿沼幸雄(編) 世代間交流効果 三学出版 2007;1-17

第2章 研修プログラムの開発

第1節 研究概要と方法

本研究は、予備調査により、研修プログラムを作成・実施する。さらに作成した研修効果を検討するため、質問紙調査とインタビュー調査2を実施する。研究デザインの概要を図1に示す。

研究1. 予備調査と研修プログラムの開発

1) 目的

先行研究¹⁾より得た仮説の妥当性検証のための予備調査を実施し、研修プログラムを作成することを目的とした。

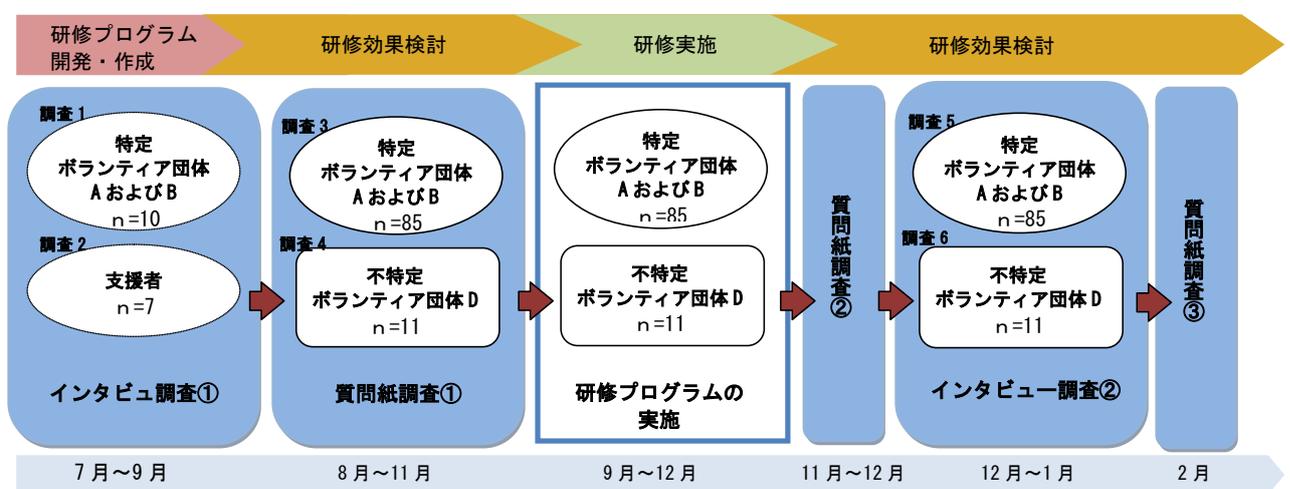


図1 研究の概要

2) 予備調査の対象

① 高齢者ボランティア調査:

首都圏2地域で子どもへの絵本の読み聞かせ活動をおこなう“りぷりん”（以下、団体Aと団体B）に所属する高齢者ボランティア10名を対象とした。高齢者ボランティアの選定は、各団体役員の協力を得て行われた。まず、各団体の定例会にて、高齢者ボランティアに調査協力を書面と口頭で依頼し、承諾を得ることができた高齢者ボランティアに対してインタビュー調査を実施した。10名の高齢者ボランティアの内訳は、男性2名であり、年齢は62～84歳（内5名が80代）であった。6名が団体Aに所属し、4名が団体Bに所属していた。

② 支援者調査:

上記①の団体AとBの役員5名（団体A=3名、団体B=2名）および、C地区で活動する絵本の読み聞かせボランティア団体（以下、団体C）の役員2名、高齢者ボランティアの活動を支援するボランティアコーディネーター3名を対象とした。これらの対象者に調査協力を書面と口頭で依頼し、承諾を得た。

3) 調査方法

上記対象者に対し、半構造化されたインタビュー調査を実施した。

4)調査項目

①高齢者ボランティア調査

ボランティア活動をおこなう意義や目的、活動をおこなう上での課題、どの程度までなら活動を継続を継続したいか、どのような状況になったらボランティア活動を引退したいか、過去に活動継続が困難となった会員の状況やその会員への支援の様子について尋ねた。

②支援者調査

支援者から見た高齢者にとってのボランティア活動の意義、どの程度までなら活動を継続できるか、継続困難に陥っている高齢者ボランティアの支援での工夫や課題について尋ねた。また、作成した研修プログラムを提示し、その妥当性に関する意見を求めた。

研究 2. 研修の実施

1. 特定のボランティア団体への研修

1)目的

特定のボランティア団体内でのメンバー間の相互支援の促進に寄与する研修内容について検討した。

2)対象

本研修プログラムの実施対象者 85 名を対象とした。対象者の内訳は、団体 A 所属の高齢者ボランティア 46 名、団体 B 所属の高齢者ボランティア 39 名である。

3)実施時期

平成 24 年 9 月～11 月に、各団体に 2 回～3 回の研修を実施した。

2. 不特定のボランティア団体への研修

1)目的

複数のボランティア団体や自主活動グループを対象とした研修プログラムの有効性の検討を目的とした。

2)対象

D 区内で活動する不特定多数のボランティアグループに所属するボランティア 11 名を対象に研修を実施した。

3)実施時期

平成 24 年 12 月に 3 回の研修を実施した。

研究 3. 研修効果検討のためのアンケート調査

1. 目的

作成した研修プログラムの効果と有用性の検討を目的とした。

2. 対象

1)特定団体向け調査

本研修プログラムの実施対象者 85 名を対象とした。対象者の内訳は、団体 A 所属の高齢者ボランティア 46 名、団体 B 所属の高齢者ボランティア 39 名である。

2)不特定グループ向け調査

神奈川県横浜市 D 区内で活動する不特定多数のボランティアグループに所属するボランティア 11 名である。

3. 調査方法

1)特定団体向け調査

団体 A と B の所属対象者に対して自記式質問表調査を 3 回実施した。実施時期は、講座受講前、受講終了直後、研修終了から 3 ヶ月後、である。

2)不特定グループ向け調査

D 区内でボランティア活動を行う対象者に、自記式質問票調査を 2 回実施した。実施時期は、研修開始前と研修終了直後である。

3)調査項目

特定団体向け調査および不特定グループ向け調査、それぞれに以下を尋ねた：i)ボランティア活動継続意向、ii)ボランティア仲間間でのソーシャルサポートの授受、iii)団体内の支援体制に対する意見や評価(詳細は巻末添付資料1を参照)。

①活動継続意向

今後どの程度まで絵本の読み聞かせ活動を続けたいかを、以下の具体的な 6 点を提示して、それぞれ「1=非常にそう思う」、「2=そう思う」、「3=どちらでもない」、「4=そう思わない」、「5=全くそう思わない」の 5 件法で質問した。

- (1) グループの仲間に活動場所への往復や、スケジュールの確認をサポートしてもらい、できる限り活動を続けたい
- (2) 絵本は読まずに、子どもとの交流や手遊びだけでも、活動内容を工夫して活動を続けたい
- (3) 絵本の読み聞かせの活動頻度を減らして、活動を続けたい
- (4) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を続けたい
- (5) 定例会だけでも参加したい
- (6) 絵本の読み聞かせ活動場所を増やして、活動を続けたい

なお、不特定グループ向け調査では、(2)、(3)、および(6)をそれぞれ以下のように変更した。

- (2) 活動内容を工夫して活動を続けたい
- (3) 活動頻度を減らして、活動を続けたい
- (6) 活動場所や機会を増やして、活動を続けたい

②活動の負担感

活動の負担感について、ボランティア活動がどの程度、楽しみになっているかについて、「1=かなり楽しみになっている」、「2=まあまあ楽しみになっている」、「3=どちらでもない」、「4=あまり楽しみになっていない」、「5=全く楽しみになっていない」の5件法で質問した。

また、読み聞かせ活動の心理的および身体的な負担の程度を、それぞれ「1=かなり負担」、「2=まあまあ負担」、「3=あまり負担でない」、「4=全く負担でない」の4件法で質問した。

③サポートの受領

グループ内のサポート受領については、団体・グループの仲間がどの程度；①心配ごとや悩み事を聞いてくれるか、②気を配ったり、思いやりを示してくれるかについて、それぞれ「1=とてもよく」、「2=よく」、「3=まあまあ」、「4=あまり」、「5=全く」の5件法で質問した。

団体・グループの仲間へのサポート提供については、団体・グループの仲間にとどの程度；①心配ごとや悩み事や困りごとを聞いてあげるか、②励ましたり、慰めたりしてあげるか、についてそれぞれ「1=とてもよく」、「2=よく」、「3=まあまあ」、「4=あまり」、「5=全く」の5件法で質問した。

団体・グループの仲間からのネガティブサポートの受領については、団体・グループの仲間がどの程度；①イライラさせたり、怒らせたりするか、②世話を焼き過ぎたり余計なお世話をすることがあるか、について「1=いつも」、「2=たいてい」、「3=ときどき」、「4=あまり」、「5=全く」の5件法で質問した。

活動継続困難者への各会員個人のサポート提供については、活動グループ内に継続困難者がいると回答した者に対して、その人をどの程度、声をかけたり気を配ったりしていかについて、「1=とてもよく」、「2=よく」、「3=まあまあ」、「4=あまり」、「5=全く」の5件法で質問した。

また、体調不良や家族介護により、活動継続に何らかの困難を感じている者に対して、活動グループの仲間が活動を継続できるようにどの程度、声をかけたり気をくばったりしてくれているかについて、「1=とてもよく」、「2=よく」、「3=まあまあ」、「4=あまり」、「5=全く」の5件法で質問した。

④継続支援に対する団体の体制や雰囲気

団体・グループの継続支援に対する雰囲気や、団体全体の雰囲気、活動継続困難者への各会員個人のサポート提供、活動継続困難者からみた支援の受領の3つの視点から検討した。

活動継続困難者への各会員個人のサポート提供については、もし仮に団体・グループ内に継続困難者がいた場合に、その人にどの程度、声をかけたり気を配ったりしてあげたいと思うかについて、「1=非常にそう思う」、「2=そう思う」、「3=どちらでもない」、「4=そう思わない」、「5=全くそう思わない」の5件法で質問した。

また、仮に自分が、体調不良や家族介護により、活動継続が困難になった場合、団体・グループの仲間が活動継続を支援してくれると思うかについて、「1=非常にそう思う」、「2=そう思う」、「3=どちらでもない」、「4=そう思わない」、「5=全くそう思わない」の5件法で質問した。

団体・グループ全体の雰囲気について、体調不良や家族介護で休みがちな会員が活動を続けやすい雰囲気にあるかについて、「1=非常にそう思う」、「2=そう思う」、「3=どちらでもない」、「4=そう思わない」、「5=全くそう思わない」の5件法で質問した。

さらに、そのような会員に対して各会員がどの程度支援すべきかを、以下の7つの項目について、「1=非常にそう思う」、「2=そう思う」、「3=どちらでもない」、「4=そう思わない」、「5=全くそう思わない」の5件法で質問し

た。

- (1). グループの仲間が活動場所への往復や、スケジュールの確認をサポートするなどにより、できる限り活動を続けられるように支援すべき
- (2). 絵本は読まずに、子どもとの交流や手遊びなど、活動内容を工夫してできるだけ活動を続けられるように支援すべき
- (3). 絵本の読み聞かせ活動頻度を減らして、活動を継続できるように支援すべき
- (4). 活動場所を近場にして、活動を継続できるように支援すべき
- (5). 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を継続できるように支援すべき
- (6). 定例会の参加だけでも勧めるべき
- (7). 特に何の支援もする必要はない

4)分析方法

①特定団体向け調査

研修開始時の各会員の活動継続意向、団体の支援体制や雰囲気、各会員が感じる活動の負担感、および各会員が知覚したサポートの授受について、団体 A と団体 B を比較検討した。分析には、独立したサンプルの T 検定を用いた。

また、研修効果について、研修前と研修終了直後、および研修前と研修終了 3 ヶ月後の変化を団体別に対応のあるサンプルの T 検定を用いて検証した。

②不特定グループ向け調査

研修効果について、研修前と研修終了直後での変化に対応のあるサンプルの T 検定を用いて検証した。

研究 4. 研修プログラム改善のためのインタビュー調査

1. 目的

研修プログラムの課題の抽出と改善を目的とした。特に、研修終了後のアンケート結果から得た考察を深掘することも目的とした。

2. 調査対象

研修を実施した団体 A と B 役員 5 名(順に 3 名、2 名)、および各団体の一般会員 4 名(団体 A=2 名、団体 B=2 名)、D 区での研修参加者 6 名、を対象とした。

3. 調査方法と実施時期

研修プログラム終了後に個別形式またはフォーカス・グループ形式によるインタビュー調査を実施した。調査綱目は、以下のとおりである。

- ① グループの現状と課題
- ② 研修後のグループや活動での変化
- ③ 研修で役立ったこと
- ④ 研修が期待に沿っていなかった場合は、その理由

第2節 研究結果と分析

第1項 研究1. 予備調査と研修プログラムの開発

1. 高齢者ボランティア調査

自分自身がボランティア活動をどの程度まで続けたいかと言った継続意向と、継続困難者にどの程度の支援をすべきかと言った団体としての支援体制に関する考えは、各高齢者ボランティアのボランティア観に影響を受けていた。

①ボランティア活動に対する考え

10名のボランティア観は、【生きがい型】と【社会的責任型】の2つの考えに大別された。【生きがい型】が主のボランティアは、ボランティア活動の主目的を、人との関わりや外出の機会の獲得、およびそれに伴う心身の健康増進であった。この見解は主に、団体B3名と団体A2名から出された。

その他の高齢者ボランティアは、【生きがい型】と目的を共有しつつも、ボランティア活動は社会的責任が伴う活動と捉え、一定の質の活動を提供することによりボランティアサービスの受け手に寄与することについて、より意義を見出していた(【社会的責任型】)。

②継続と引退に対する考え

全てのボランティアは、「人に迷惑をかけない間だけ続けるべき」と考えていた。この「人に迷惑をかけない」程度について尋ねると、自分で活動場所まで移動できる、スケジュール管理を出来る、程度までが主であった。

しかし、【生きがい型】の高齢者ボランティアは、平成22年度までの事前調査で得た結果と同様に、現在の活動場所まで移動できない場合は、徒歩圏内の近場の施設で活動する、活動頻度を減らす、活動内容を絵本の読み聞かせに限ることなく簡易なものに工夫するなどにより、「できる範囲の活動」したいと考えていた。したがって、活動の継続が困難と思われる会員に対しても、その人ができる範囲で活動できるように、支援するべきであると考えていた。

実際に、これらの高齢者ボランティアの所属する小グループ^{注1)}では、例えば、活動内容を簡易にする、活動頻度を減らす、徒歩圏内の近場の施設でのみ活動する、絵本を持っていない高齢者ボランティアの本を代わりに持つ、欠席が続く会員に電話する・定例会の資料を届ける等による声かけ、といった支援が行われていると語っていた。ただし、このような支援は、全ての【生きがい型】の高齢者ボランティアの所属する小グループでおこなわれてはいる訳ではなかった。むしろ、団体Bで頻繁におこなわれているものであった。

一方で、【社会的責任型】の高齢者ボランティアは、一定の質の絵本読み聞かせを子どもにおこなうことに責任をより強く感じているために、それができなくなった場合は引退して、その人の状況にあった次の活動(例、デイサービスなど)へ移行するべきと考えていた。したがって、【生きがい型】のボランティアとは異なり、一定の役割を果たせないボランティアを無理に支援する必要はないとしていた。また、体調不良や家族介護など、何らかの事情を抱えて欠席する会員に電話等の声かけは、相手のプライバシーに立ち入るだけでなく、相手に復帰への精神的負担を与えかねないと、むしろ支援に気がねをする傾向もあった。この考えは団体Aの高齢者ボランティアから多く出された。

注1)“りぶりんど”の通常の活動は、活動施設(小学校、幼稚園、保育園、児童館など)別の6~8人程度の小グループ単位でおこなわれている。

2. 支援者調査

高齢者ボランティアの活動を支援する団体役員やコーディネーターを対象に次の4点を尋ねた：i)支援者から見たボランティア活動の意義、ii)どのくらいまでなら活動を継続できるかと言ったボランティア活動継続に対する支援者の見解、iii)継続困難に陥っている高齢者ボランティアの支援での課題。

①所属団体役員からみた継続支援の課題

団体A、団体B、および団体C)の7名の役員から回答を得た。各団体の会員間の関係性、各会員の健康状態などにより、役員が課題と捉えている事柄が異なった。

C団体は設立5年であり、比較的に健康な会員が多い上に、会員間の相互支援が行き届いていると、役員は捉えていた。そのために、団体内で、活動継続困難者の処遇や対応に対する課題意識がないと指摘していた。

団体設立から8年が経過し、実際に活動継続困難者を抱える団体Aと団体Bは、具体的な支援をおこなう上での課題を指摘していた。例えば、認知症症状が見られる高齢者ボランティアにスケジュール確認の電話をしても結局は忘れて欠席する、体力が低下している高齢者ボランティアの施設内での階段の昇降を他の会員が支援していたが、結局は気力低下に伴い欠席が続くようになった、といった支援の限界が報告された。そして、このような状況に陥っている会員に対し、周囲がどの程度まで支援できるのか、および支援者への負担が指摘された。さらに、体力低下に伴い読み聞かせの声が小さくなったために、大人数の小学生を対象とした読み聞かせが困難になってきた会員に対し、少人数の保育園児を対象とした読み聞かせへ移行を促したいが、本人に自覚がなく意向を促せないと言った課題もあった。このような自身の課題に対する自覚が欠如する継続困難者をどのように新たな活動形態に誘導するのかと言った課題が指摘された。

その一方で、会員個人間の信頼関係がある場合は、お互いが抱える課題を理解・支援し合うことができるといった経験を踏まえ、会員間の信頼関係構築を促すことが継続支援に寄与するとの意見が、3団体の全ての役員より出された。

②ボランティアコーディネーターからみた課題

コーディネーターが指摘する課題は、ボランティア受入れ側(小学校、幼稚園・保育園、児童館など)のニーズと高齢者ボランティアの現状を調整することであった。すなわち、ボランティア受入れ側の求める活動を行うためには、高齢者ボランティアが一定の質の活動に関する技術習得と維持、および遅刻や欠席をせずに参加するなどの責任を持つ必要がある。したがって、「弱っている人」がそのニーズに対応できるのかに対する危惧があった。

そのための対応策として、1名のコーディネーターは、活動の質の低下が見られる高齢者ボランティアおよび長期欠席者に対して、スキルアップなどを目的としたフォローアップ講座実施などの支援をおこなっていた。しかし、ボランティア役員の指摘と同様に、継続困難者自身に課題の自覚がない場合があり、そのような会員に自覚を促すことの困難さを指摘していた。

また、別のコーディネーターは、気力や体力の衰えに伴う活動の限界および高齢者自身の尊厳の尊重を指摘していた。すなわち、加齢に伴い身体・認知機能が衰え始めた者は、ボランティアをはじめとする社会参加活動に対する意欲を喪失していく。その状況にある者に対し、敢えて継続を促すことは、高齢者自身の心身の負担を増すという意見であった。さらに、衰えて行く様子を他者に「晒す」ことは、その高齢者の尊厳を損なうとす

る考えであった。

以上のような課題を踏まえ、コーディネーターは、団体・グループ内での相互支援(「チームワークで生涯現役」)の重要性を強調していた。具体的な方法として、衰えていく高齢者ボランティアの不得意な点や出来なくなっている事柄を理解し、それをフォローするように各会員が動くこと(「どうやってこの人が活動できるように助けようか、という発想で各自が動くことが大事」)が重要としていた。そのような団体にするために、各会員が「自分が楽しむための活動」から「チームで楽しむ活動」へと「発想を転換」することが求められていると指摘していた。そして、それが各会員に伝わる研修とするべきとの意見を得た。

ただし、この意見に対し、実際に支援することの課題も別のコーディネーターから指摘された。それは、支援のつもりで提供した活動内容が適切でなかったために、継続困難者の自尊心を傷つけてしまうという課題である。実際に、この団体では、認知機能が低下しつつある高齢者ボランティアに簡単と思われる活動内容を割り当てた。しかし、実際にはその高齢者ボランティアが適切にその活動内容を適切に実行することができず、かえって自尊心を傷つけてしまったという^{注2)}。

さらに、団体内の関係性を悪化させる要因として、コミュニケーションに関する課題が指摘された。例えば、反省会などの活動の振り返りの場において、ある会員の活動の質や頻度が団体・グループの基準とされるものと一致しないと、他の会員が判断した場合に、そのように判断された会員を批判する、といった課題があると言う。お互いを尊重した注意や指摘の仕方を習得すべきとの意見も出された。

注 2) 提供されたプログラム内容:誰もが知っている昔の歌を歌いながら、手を動かす手遊び。対象となった継続支援者は、両隣の会員の手の動きを真似つつ、歌うものであった。

第2項 研究2. 研修の実施

研究1の結果を踏まえ本研究では、健康障害や家族介護などの多様なライフイベントがあったとしても、できるだけ長くボランティア活動を継続できる団体・グループの「雰囲気」を醸成することを目的とした研修プログラムを実施した。特に、以下の3点を研修にて提示した。

- ①認知症や筋力低下など、高齢期の様々な問題とその対応方法について検討する。
- ②ボランティア活動継続の重要性を再確認する。
- ③ボランティアメンバー間で活動継続にむけた相互支援がおこなわれるような団体・グループの環境を醸成する。

1. 講座の概要と展開

講座の概要と展開を表1に記す。

表1 講座の概要と展開

項目	時間	内 容
1	35分	■シニアのボランティア活動の意義 ・シニアボランティアの地域や子どもへの効果 ・シニアボランティアの心身・認知機能への効果 QOL 向上への効果
2	35分	■加齢に伴う体の問題とその対処について ・身体機能の変化とその原因 ・身体機能の低下への対処方法
3	30分	■認知症症状の理解とその対応方法について ・認知症症状とメカニズムを知る ・認知症症状への対処方法を学ぶ
4	75分	■自分たちの活動の意義を再確認する ・受け手のニーズを理解する ・活動の目的を再確認する
5	30分	■コミュニケーションスキルアップ ・相手を思いやった声掛け、話の聴き方
6	60分	■グループワーク ・「楽しく活動を続けるための工夫」(継続困難者支援の具体的な方法を話し合う、活動の目的を再確認する)

項目1「シニアのボランティア活動の意義」

高齢者がボランティア活動をする意義、ボランティア活動と健康の関連、特に継続的にボランティア活動することがどのような効果をもたらすのか、について考える。さらに、ボランティア活動における地域や社会などへの効果や意義について考える。

項目2「加齢に伴う体の問題とその対処について」

筋力低下や体力低下など、高齢期に起きる身体変化の症状とその原因を理解する。その上で、高齢者がボランティア活動をおこなう上で、身体機能についてどのような配慮が必要かを考える。

項目3「認知症症状の理解とその対応方法について」

認知症症状と対応方法を正しく理解することにより、認知機能の低下が認められる会員に対する正しい支援の仕方を考える。さらに、認知症の進行度合いとそれに伴い出現する症状を理解し、認知症症状が見られる高齢者ボランティアであっても、活動を継続できる可能性を理解する。

項目 4「自分たちの活動の意義を再確認する」

自身が関わるボランティア活動の意義を再確認する。特に、活動の受け手のニーズ(活動への期待や評価)を理解することで、自分たちが想定していなかった新たなニーズを知り、活動を再度見直す機会とする。特定団体向け研修では、受け手である学校の職員を招き、学校側からみた高齢者ボランティアの活動の評価と期待について講義をおこなった(30分)。また、後半では学校職員、団体コーディネーター、ファシリテーター3者による対談形式で高齢者によるボランティア活動に対する期待や評価を尋ねた(45分)。

項目 5「コミュニケーションスキルアップ」

活動内容や組織運営について個々の思いや意見を円滑に伝えあえるコミュニケーション能力を身につける。会員間がお互いを配慮しあい、思いやった声のかけ方や話の聴き方を理解する。

項目 6「グループワーク」

ディスカッションを通して団体・グループ内でグループ活動の意義を再確認すると同時に、継続困難に陥っている会員の支援策など、各会員が長く活動を継続するための具体的な支援策や工夫を考える。項目 5「コミュニケーションスキルアップ」を受けた上でおこなうことが望ましい。

2. 講座の実施

各研修の参加状況は以下の通りであった。

表 2 団体 A への研修

研修実施日	研修内容	参加人数
第1回 9/18	「シニアのボランティア活動の意義」 「老いと上手につきあいながら活動するコツ」	45名 (男性4名、女性41名)
第2回 10/16	「学校側からみたシニアによるボランティア活動」	47名 (男性3名、女性44名)
第3回 11/20	「みんなで認知症について考える」 「コミュニケーションスキルアップ」 「グループワーク」	39名 (男性3名、女性36名)



写真 1-1. 第 1 回講座の様子



写真 1-2. 第 2 回講座の様子



写真 1-3.第 3 回講座の様子(グループワーク)

表 3 団体 B への研修

研修実施日	研修内容	参加人数
第1回 10/3	「シニアのボランティア活動の意義」 「老いと上手につきあいながら活動するコツ」 「学校側からみたシニアによるボランティア活動」	46 名 (男性 5 名、女性 41 名)
第2回 11/7	「認知症症状の理解とその対応方法について」 「コミュニケーションスキルアップ」 「グループワーク」	46 名 (男性 5 名、女性 41 名)



写真 2-1.第 1 回講座の様子



写真 2-2.第 2 回講座の様子①



写真 2-3.第 2 回講座の様子②



写真 2-4.第 2 回講座の様子③(グループワーク)

表 4 D 区での不特定のボランティア団体への研修

研修実施日	研修内容	参加人数
第1回 11/29	「体を元気にしよう」 シニアの活動における工夫、 認知症や高齢期の様々な問題について	11名 (男性4名、女性7名)
第2回 12/6	「活動を元気にしよう」 充実のための3つのポイント コミュニケーション力をアップしよう 「グループワーク」	8名 (男性2名、女性6名)
第3回 12/13	「グループを元気にしよう」 明日からのグループ活動をもっと楽しく！ 「グループワーク」	7名 (男性1名、女性6名)



写真 3-1.第 1 回講座の様子



写真 3-2.第 2 回講座の様子



写真 3-3.第 3 回講座の様子

第3項 研究3. 研修効果検討のためのアンケート調査

1. 特定団体向け調査

①ベースライン時の2団体の特徴

a)継続に関する意向

各会員に、継続が困難になってきた場合に、どの程度まで読み聞かせボランティア活動を継続したいか、継続意向について尋ねた。「1=非常にそう思う」「2=そう思う」を合わせた「そう思う」(団体別の継続意向)を表5に示した。活動方法などを工夫しての継続を希望する意向は半数以下にとどまる一方で、「現在のレベルを維持できる間だけ続けたい」の意向が両団体で約8割を占めていた。

表5 団体別の継続意向

	団体 A(n=45)	団体 B(n=38)
本人の継続意向		
活動場所への移動を支援してもらい続けたい	22.2%	44.7%
活動内容を工夫して続けたい	8.9%	7.9%
活動頻度を減らして続けたい	35.6%	36.8%
現在のレベルを維持できている間だけ続けたい	77.8%	81.6%
定例会だけでも参加して続けたい	22.2%	23.7%

次に、2団体間での継続意向に関して比較検討した。「活動場所への移動やスケジュールの確認を支援してもらい活動を続けたい」において、統計的に有意な差が見られた。ただし、両団体とも希望しない意向が強いが、団体Aにおいてその傾向がより強かった(表6)。

表6 団体別の継続意向(t検定結果)

	団体 A(n=45)	団体 B(n=38)	P値
本人の継続意向			
活動場所への移動を支援してもらい続けたい	3.6±1.18	3.0±1.21	.02**
活動内容を工夫して続けたい	4.0±1.00	3.7±.90	.15
活動頻度を減らして続けたい	3.2±1.17	3.0±1.10	.42
現在のレベルを維持できている間だけ続けたい	2.2±1.11	2.1±.74	.60
定例会だけでも参加して続けたい	3.6±1.25	3.3±.88	.19

b)活動の負担感

活動がどの程度、楽しみになっているか、および心理的または身体的に負担となっているかを尋ね、その結果を表7に示した。「かなり楽しみになっている」「まあまあ楽しみになっている」をあわせた「楽しみになっている」が団体Kでは、9割を超えているのに対し、団体Nでは7割弱であった。また、活動が心理的に「かなり負担」「まあまあ負担」を合計した「負担になっている」割合が団体Nでは、半数を超えていたのに対し、団体Bでは2割強にとどまった。

表 7 団体別の活動の負担感

	団体 A(n=45)	団体 B(n=38)
活動の負担感		
活動が楽しみになっている	68.9%	94.7%
活動に心理的負担を感じる	51.1%	26.3%
活動に心理的負担を感じる身体的な負担を感じる	31.1%	21.1%

2 団体の違いを、独立したサンプルの T 検定により検討した結果を表 8 に示した。その結果、「活動が楽しみになっている」および「活動に心理的負担を感じる」で有意差が見られた。すなわち、団体 B は、団体 A に比べ、活動を楽しみとする者が多く、心理的負担を感じる者が少ない傾向にあると言える(表 8)。

表 8 団体別の活動の負担感(t検定結果)

	団体 A(n=45)	団体 B(n=38)	P 値
活動の負担感			
活動が楽しみになっている	2.2±.76	1.7±.57	.00***
活動に心理的負担を感じる	2.4±.74	2.7±.60	.02**
活動に心理的負担を感じる身体的な負担を感じる	2.8±.76	2.9±.53	.63

c)知覚した支援

個人が知覚したサポートの授受を検討した。表 9 に、「とてもよく」と「よく」を合計したサポート受領と提供の量を、団体別に示した。

表 9 団体別の個人が知覚したサポート

	団体 A(n=45)	団体 B(n=38)
サポート受領		
心配事や悩みを聞いてくれる	46.7%	63.2%
気を配ったり、思いやりを示してくれる	53.3%	73.7%
サポート提供		
心配事や悩み事を聞く	33.3%	47.4%
励ましたり、慰めたりする	42.2%	50.0%
ネガティブサポートの受領		
怒らせたり、イライラさせる	6.7%	0.0%
世話を焼き過ぎる	8.9%	0.0%

次に、サポートの授受について、2 団体を独立したサンプルの T 検定により比較した。上記表 9 では、サポートの受領において、団体 B が団体 A よりも、受領していると知覚する者の割合が多くなっていた。しかし表 10 では、両団体に統計的な有意差は見られなかった。一方、ネガティブサポートの受領では有意差がみられ、団体 A においてネガティブサポートの受領がより高い傾向にあった。

表 10 団体別の個人が知覚したサポート(t 検定結果)

	団体 A(n=45)	団体 B(n=38)	P 値
サポート受領			
心配事や悩みを聞いてくれる	2.6±.97	2.5±.89	.80
気を配ったり、思いやりを示してくれる	2.4±.96	2.3±.2.3	.46
サポート提供			
心配事や悩み事を聞く	2.8±.67	2.6±.68	.33
励ましたり、慰めたりする	2.6±.68	2.6±.63	.93
ネガティブサポートの受領			
怒らせたり、イライラさせる	3.6±.84	3.9±.74	.08*
世話を焼き過ぎる	3.9±.93	4.2±.58	.09*

d)継続に対する団体の体制

各会員が自団体が活動継続の支援体制がどの程度あるか、各会員がどの程度まで支援をすべきと考えているかを尋ねた。まず、自団体が継続困難者が継続しやすい雰囲気があると思うかを尋ねたところ、団体 B では「非常にそう思」と「そう思う」をあわせた「そう思う」が 6 割以上であったのに対し、団体 A では 4 割以下にとどまっていた。「活動継続が困難と感じている者に対し、他の仲間が支援してくれているかを尋ねたところ、両団体ともそれぞれ 66.7%と 75.0%が「支援してくれている」と回答していた。また、「仮に継続困難に陥ったら、仲間が助けてくれると思う」もそれぞれ 5 割弱から 6 割弱であった。

会としてどの程度支援すべきかといった会としてのあるべき体制、および自分自身が継続困難者をどの程度支援しているか・支援したいかといった個々人の行動や意向を尋ねた結果を表 11 に示した。

表 11 団体別 継続に対する団体の体制

	団体 A(n=45)	団体 B(n=38)
知覚した会の支援体制		
困難者が継続しやすい雰囲気ある	37.8%	60.5%
(継続困難者に)仲間が継続支援してくれる	66.7%	75.0%
仮に継続困難に陥ったら、仲間が助けてくれる	48.9%	57.9%
会としてあるべき支援体制・会員個人の支援現状や意向		
活動場所への移動支援すべき	48.9%	65.8%
活動内容を工夫して支援すべき	35.6%	52.6%
頻度を減らして支援すべき	55.6%	81.6%
近場の活動場所にして支援すべき	66.7%	89.5%
現在のレベルで活動できる間のみ支援すべき	60.0%	39.5%
定例会参加のみでも支援すべき	42.2%	23.7%
特に何もする必要ない	11.1%	0.0%
(継続困難者に)自分が継続支援している	24.1%	41.7%
仮に継続困難者がいたら、気を配りたい	31.1%	48.6%

次に 2 団体の違いを独りしたサンプルの T 検定により検討した(表 12)。その結果、活動場所への移動、内容の工夫、活動頻度を減らす、近場での活動場所にするといった具体的な支援策の指示において有意に違いが見られた。すなわち、団体 B では、これらの具体的な支援方法により継続を支援すべきと考える者が多い傾向にあることが窺われた。また、継続困難者がいた場合にも、「気を配る」等の支援をしたいと意向する会員が団体 B でより多い傾向があった。さらに、知覚した会の支援体制においても、団体 B では、団体が「継続困難者が継続しやすい雰囲気ある」と知覚する者が多い傾向(有意傾向)が見られた。

表 12 団体別 継続に対する団体の体制(t 検定結果)

	団体 A(n=45)	団体 B(n=38)	P 値
会としてあるべき支援体制・会員個人の支援現状や意向			
活動場所への移動支援すべき	2.7±1.10	2.3±.63	.06*
活動内容を工夫して支援すべき	3.0±1.02	2.4±.60	.00***
頻同を減らして支援すべき	2.6±1.05	2.1±.48	.01***
近場の活動場所にして支援すべき	2.5±.97	2.0±.49	.00***
現在のレベルで活動できる間のみ支援すべき	2.5±.84	2.8±.81	.13
定例会参加のみでも支援すべき	2.8±.98	2.8±.64	.64
特に何もする必要ない	3.8±.97	3.7±.74	.70
(継続困難者に)自分が継続支援している	3.1±.88	2.8±1.11	.24
仮に継続困難者がいたら、気を配りたい	2.8±.80	2.4±.73	.04**
知覚した会の支援体制			
困難者が継続しやすい雰囲気ある	2.8±.94	2.5±.76	.09*
(継続困難者に)仲間が継続支援してくれる	2.4±.90	1.8±1.5	.68
仮に継続困難に陥ったら、仲間が助けてくれる	2.7±.93	2.5±.76	.31

*有意傾向, **>.05, ***>.01

②研修の効果の検討

ベースラインと研修終了直後共に欠損が少ない 67 名(A 区 36 名、B 区 31 名)を分析の対象とした。研修の効果、研修開始前と研修終了直後、研修開始前と研修 3 ヶ月後の 2 時点で比較検討した。両グループを統合した場合には、統計的に有意な効果が見られなかった。そこで、グループ別に研修効果を検討した(表 13)。

表 13 団体別の研修効果(研修前 研修後の比較)

	団体 A(n=36)			団体 B(n=31)		
	研修前	研修後	P 値	研修前	研修後	P 値
サポート受領						
心配事や悩みを聞いてくれる	2.8±1.01	2.6±.15	0.56	2.7±.98	2.6±.81	0.41
気を配ってくれる	2.4±.96	2.4±.93	0.8	2.3±.75	2.4±.61	0.77
(継続困難者に)仲間が継続支援してくれる	2.8±.48	3.8±.63	0.25	2.0±1.73	2.7±.58	1
サポート提供						
心配事や悩み事を聞く	2.8±.67	2.7±.59	0.32	2.7±.71	2.8±.76	0.26
気を配る	2.59±.70	2.6±.60	0.8	2.7±.66	2.6±.62	0.37
(継続困難者に)自分が継続支援している	2.9±.85	2.5±.89	0.03**	3.0±1.42	3.0±.58	0.5
活動の負担感						
活動が楽しみになっている	2.1±.12	2.2±.79	0.68	1.7±.59	1.6±.67	0.44
活動に心理的負担を感じる	2.4±.76	2.4±.74	0.5	2.8±.59	2.9±.59	0.54
活動に身体的な負担を感じる	2.8±.79	2.8±.69	0.62	3.0±.47	3.0±.47	0.54
ネガティブサポートの受領						
怒らせたり、イライラさせる	3.5±.85	3.4±.90	0.52	3.8±.74	3.9±.67	0.77
世話を焼き過ぎる	3.9±.89	3.9±.91	0.87	4.2±.60	4.2±.45	0.75
会の支援体制						
困難者が継続しやすい雰囲気ある	2.9±.98	3.1±.98	0.37	2.5±.77	2.7±.75	0.33
活動場所への移動支援すべき	2.8±1.2	2.8±1.1	0.86	2.3±.59	2.5±.72	0.09*
活動内容を工夫して支援すべき	2.9±1.05	2.9±1.00	0.8	2.4±.56	2.4±.62	0.79
頻度を減らして支援すべき	2.6±1.06	2.3±1.01	0.03**	2.1±.50	2.2±.60	0.42
近場の活動場所にして支援すべき	2.6±1.05	2.3±1.04	0.1	2.0±.45	2.1±.65	0.41

*有意傾向,**>.05

団体 A では、全体的に大きな変化は見られなかった。しかし、継続困難者に対するサポート提供の行動において有意に改善していた。また、具体的な支援策の一つである「頻度を減らして継続することを支援すべき」との考えが有意に改善していた。

一方、B 区では、会の支援体制において、活動場所への移動支援に関する指示が有意に低下する、現在のレベルで活動できるあいだのみ支援すべきという見解に対する支持率が有意に上昇するなど、ネガティブな効果が見られた。その一方で、本人の継続意向では、「現在のレベルを維持できる間だけ続けたい」において、「そう思う」という者の割合が有意傾向に減少した。

③特定団体研修終了 3 ヶ月後効果評価

研修終了 3 ヶ月後に、i) 自分自身の継続に役に立ったか、および ii) 各会員が継続しやすい団体の雰囲気づくりに役立ったか、を問い研修の効果を検討した。その結果を「表 14. 団体別の研修効果(3 ヶ月後評価)」に示した。

その結果、両団体において「とても役に立った」と「まあまあ役に立った」をあわせた「役に立った」がそれぞれ約 8 割であった。しかし、「とても役に立った」だけに着目すると団体 A でより高い評価を得ている事が示唆された。

表 14 団体別の研修効果(3ヶ月後の評価)

	団体 A(n=30)	団体 B(n=28)	p値
自身の継続に役立った			0.003***
とても役に立った	56.7%	21.4%	
まあまあ役に立った	23.3%	67.9%	
あまり役に立たなかった	20.0%	10.7%	
継続しやすい団体の雰囲気づくりに役立った			0.127
とても役に立った	36.7%	18.5%	
まあまあ役に立った	40.0%	66.7%	
あまり役に立たなかった	23.3%	14.8%	

***>.01

次に、研修終了 3 ヶ月後とベースライン時の、サポートの授受、各会員の継続意向、団体がどこまで支援すべきかといった支援提供に関する考えを比較した(表 12)。その結果、団体 A では、ベースライン時と 3 カ月後で統計的に有意な違いは見られなくなっていた。すなわち、団体 A では研修終了直後に見られた効果は 3 ヶ月後には持続しなかった。団体 B においては、活動場所への移動を支援する、および内容を工夫して支援すべきといった団体としての支援提供に関する考えで、有意に支持率が低下していた。一方で、現在のレベルで活動できる間のみ継続したいでは、有意に支持率が改善していた。

表 15 研修開始時と終了 3ヶ月後の比較

	団体 A(n=36)			団体 B(n=31)		
	研修前	研修後	P 値	研修前	研修後	P 値
サポート受領						
心配事や悩みを聞いてくれる	2.8±1.01	2.8±.97	.28	2.6±.94	2.6±.68	0.41
気を配ってくれる	2.4±1.03	2.6±.99	.19	2.3±.73	2.3±.65	0.77
(継続困難者に)仲間が継続支援してくれる	2.7±1.6	2.7±1.16	0.25			
サポート提供						
心配事や悩み事を聞く	2.8±.74	2.9±.84	.50	2.7±.70	2.7±.60	0.26
気を配る	2.6±.65	2.7±.88	0.8	2.7±.64	2.6±.61	0.37
(継続困難者に)自分が継続支援している	3.1±.83	3.0±1.10	0.03**	2.8±1.33	3.0±.89	0.5
継続困難者がいた場合に支援したい	2.8±.87	3.0±1.14	0.37	2.5±.62	2.8±.65	.01***
活動の負担感						
活動が楽しみになっている	2.2±.66	2.1±.66	0.68	1.7±.58	1.6±.67	0.10
活動に心理的負担を感じる	2.4±.78	2.5±.69	0.5	2.9±.58	3.1±.58	.03**
活動に身体的な負担を感じる	2.9±.81	2.8±.63	0.62	2.9±.47	3.1±.62	.05**
ネガティブサポートの受領						
怒らせたり、イライラさせる	3.6±.83	3.5±.75	0.52	3.8±.69	3.9±.55	0.77
世話を焼き過ぎる	3.9±.94	4.0±.53	0.87	4.2±.57	4.3±.44	0.75
会の支援体制						
継続困難に陥ったら支援を受けられる	2.6±1.05	2.8±1.20	0.37	2.7±.73	2.5±.69	0.33
困難者が継続しやすい雰囲気ある	3.0±.98	3.0±.96	0.37	2.5±.64	2.7±.75	0.33
活動場所への移動支援すべき	2.7±1.13	2.8±1.2	0.86	2.3±.60	2.7±.77	.03**
活動内容を工夫して支援すべき	2.9±1.01	3.1±.79	0.8	2.4±.61	2.7±.74	.03**

>.05, *>.01

2. 不特定団体向け調査

11名から回答を得た。11名は表1のようなボランティアまたは社会参加活動の団体・グループに属していた。各調査協力者は複数の団体・グループに属していた(表13)。

表 16 研修参加者ボランティア活動内容の内訳

活動内容	n (%)	活動内容	n (%)
趣味活動	6 (54.5)	高齢者支援活動	2 (18.2)
その他	4 (36.4)	文化・芸術活動	2 (18.2)
学校支援活動	3 (27.3)	青少年支援活動	1 (9.1)
子育て支援活動	2 (18.2)		

n=11名、複数回答

次に研修により研修受講者の継続困難者への支援に関する意識や行動がどのように変化したか、研修の効果を対応のあるサンプルのT検定で検討した(表14)。その結果、団体・グループの他の会員に対して、研修受講者が慰めや励ましなどの支援を提供する行動において、研修後に減少する傾向が見られた(有意傾向)。一方で、継続困難者への具体的な支援策に対する意見では、「活動の頻度を減らして支援すべき」に対する支持が研修後に若干向上していた(有意傾向)。

表 17 不特定団体向け研修の効果

	研修前	研修後	P 値
サポート提供			
心配事や悩み事を聞く	2.2±.63	2.5±.53	.193
励ましたり、慰めたりする	2.3±.48	2.6±.52	.08*
(継続困難者に)自分が継続支援している(行動)	2.7±.42	3.05±.82	.522
継続困難者を支援したい(意向)	2.7±.68	2.6±.52	.59
会の支援体制			
困難者が継続しやすい雰囲気ある	2.7±.68	2.4±.52	.34
活動場所への移動支援すべき	2.4±.84	2.4±.70	1.00
活動内容を工夫して支援すべき	2.4±.97	2.0±.00	.22
頻度を減らして支援すべき	2.3±.68	2.0±.48	.08*
現在のレベルで活動できる間のみ支援すべき	2.9±.74	2.7±.68	.51
定例会参加のみでも支援すべき	2.4±1.08	2.2±.63	.59
特に何もする必要ない	3.8±.79	4.2±.422	.10
本人の継続意向			
活動場所への移動を支援してもらい続けたい	2.9±1.37	3.0±1.25	.73
活動内容を工夫して続けたい	1.9±.57	1.9±.57	1.00
活動頻度を減らして続けたい	2.3±1.06	2.3±.82	1.00
現在のレベルを維持できている間だけ続けたい	2.7±.82	2.3±.68	.22
定例会だけでも参加して続けたい	2.8±.92	3.1±.88	.52
継続困難に陥ったら支援を受けたい	3.2±1.03	3.3±.68	.78

*有意傾向

第4項 研究4. 研修プログラム改善のためのインタビュー調査

研修プログラムの効果評価(研究3)の結果、不特定団体向けと特定団体向けの研修において、それぞれに顕著な研修効果が認められなかった。そこで、研修を実施した団体AとBの役員5名(順に3名、2名)、および各団体の一般会員4名(団体A=2名、団体B=2名)、D区の研修参加者6名を対象に研修プログラム改善に向けたインタビュー調査を実施した。以下に、研修効果が認められなかった理由を論じる。

1. 特定団体向け調査

インタビュー協力者の内訳は、80代の後期高齢者4名(団体A=3名、団体B=1名)、70代前半の会員1名(団体B)、および団体AとBの役員5名であった。

①被支援者の視点による研修評価

80代の後期高齢者4名に研修実施前と研修終了後に、活動継続に対する意向の変化を尋ねた結果、変化がないとの回答を得た。そして、スケジュール維持が困難になる、体力低下を感じる場合は引退し、他の会

員からの慰留などの声掛けは望まないとしていた。その理由は、先述の「不特定のボランティア団体への研修プログラム改善に向けた調査」で指摘されたこと同様に、ボランティア活動では一定の責任を果たすことが求められるが、それができない場合は他の会員へ迷惑をかけるからである。加えて、3名のインタビュー協力者からは、衰えた姿を他者に「晒したくない」との意見も出た。

さらに、「不特定のボランティア団体への研修プログラム改善に向けた調査」同様に、ボランティア団体・グループとは、一定の責任と任務の遂行のために個々人が自由意思で集った団体であり、他者の健康状態などのプライバシーに立ち入って付き合うことは団体の運営上、好ましくないとしていた。

②支援者の視点による研修評価

支援者の内訳は、団体Aの役員3名(内、男性1名)、団体Bの役員2名(男性2名)と70代前半の会員1名(女性)である。団体Bに所属する70代前半の会員は、団体役員およびその他の会員から「支援者」として本研究のインタビュー対象者に紹介された。団体Aと団体Bで研修に対する評価が異なった。

団体Aからは、本研修の特にコミュニケーション論が会員間の相互支援や相手を配慮したコミュニケーションの意識付けに一定の影響を与えた可能性が指摘された。しかし、実施時期や頻度に関する指摘を受けた。まず、研修の実施時期は、既に会員間のコミュニケーション課題が表面化し始めた段階での実施ではなく、団体発足時に継続的に実施すべきであったとの意見を得た。さらに、数回の研修で得た知識や視点が実際の意識や行動変容に至ることは不可能であることから、継続的な研修実施の必要性も指摘された。

一方、団体Bの役員と70代の会員からは、研修で得た知識を実際の活動に取り入れることに関してイメージができなかったとの指摘を得た。団体Bは、継続困難者の活動内容を工夫する・スケジュールを忘れる者の補充者を常に用意するなどの助け合いを実施してきているという。しかし、それらの試みだけでは支援しきれない会員がいること、それを支援する会員の負担が増加していること、継続困難者の活動内容がボランティア活動受け入手のニーズに合っていないことを受け手より指摘されていることなどの限界が指摘された。それを踏まえ、各回の講座で得た知識を具体的な場面でどのように活用して行くのかと言った実効性に繋がる研修とすべきであったとの指摘を得た。それにより、例えば、継続困難者に活動施設をより適した施設へ変更することを相手を傷つけることなく告げることができるなど円滑な支援ができる可能性が指摘された。

2. 不特定のボランティア団体への研修プログラム改善に向けた調査

①継続困難者の活動の現状

インタビュー調査の協力者の所属する団体・グループでは、継続困難者への支援が課題として団・グループ内で認識されていない現状が指摘された。その理由の一つとして、これまで通り活動ができなくなった継続困難者が自発的かつ自然に引退していくことが挙げられた。したがって、支援を要する状態に陥ることが少ない。

加えて、継続困難者が団体・グループに留まった場合に、ボランティアサービスの受け手のニーズを満たす活動ができないこと、継続困難者を支援する会員が高くなることを理由に引退へ誘導していた。例えば、認知機能低下がみられる学校支援ボランティアが、スケジュール忘れに起因する無断欠席が続いたことから、引退を勧告した事例が紹介された。この事例では、継続困難者の欠席を補うために、別の会員が待機する、学校へ謝罪するなどにより他の会員や役員の負担が高かったことが合わせて報告された。

②研修に対する評価とその理由

上記①の継続困難者の団体・グループ内での現状を踏まえ、本研修プログラムにより何らかの意識変容があったかといった研修プログラムに対する評価、およびそのように評価する理由を尋ねた。その結果、団体・グループ内に継続困難者がいた場合にも、やはり活動継続の支援は特に行わないとする意見が主であり、意識変容は見られなかった。

意識変容が起きなかった主要因はボランティア観にあった。すなわち、インタビュー協力者も含め多くの会員の意識として、趣味活動と異なり、ボランティア活動とはその団体が掲げる活動内容を遂行できる限りでおこなう活動である。したがって、それができなくなった場合はその人の状態にあった活動や責任を伴わない趣味活動へ移行することが、継続困難者にとっても団体にとっても良いという考えである。そして、団体・グループの存続のためには、継続困難者の救済よりも新人ボランティアの養成が不可欠であるとの意見もあった。

さらに、健康障害がある人や家族介護で多忙な人のプライバシーに立ち入って声をかけることは好ましくないとする考えがあった。その理由として、ボランティア団体・グループとは、一定の責任と任務の遂行のために個人が自由意思で集った団体であり、その活動への参加が困難となった者へ「無理強い」はできないことが挙げられた。

研修により得た効果も指摘された。それは、社会参加活動が認知機能や身体機能の低下の遅延に寄与する可能性についての学びにより、自身が活動を継続することが重要であるところに対する気づきを得たことであった。

第3節 考察

1. 相互支援関係を醸成する研修プログラムの作成

研修作成を目的とした研究1の予備調査では、2種のボランティア観と、それに関連した継続支援に対する見解が明らかになった。まず、ボランティア活動を健康増進や社会的繋がり機会の獲得と捉える(生きがい型)者は、活動内容を工夫する等の柔軟な活動により、活動を継続することを意向していた。そして、他の会員に対しても柔軟な活動方法で支援すべきであると考え、実際にそのような支援の授受がおこなわれていた。これは主に団体Bで多く出された意見であることから、団体Bは団体内の相互支援関係がある程度熟成された団体であると考えた。

一方で、ボランティア活動を社会的繋がり機会の獲得の場と捉えつつも、そこには社会的責任が伴うので、質の高いサービスを提供することが重要と捉える高齢者ボランティアは、一定の役割を果たせなくなった会員は引退すべきと捉えていた。この考えは特に団体Aで多く指摘されていたことから、団体AはBに比べ相互支援関係が十分に醸成されていない団体と捉えた。

さらに、研究1のコーディネーターや団体役員を対象とした調査から、継続が困難な者に対する支援の限界や他の会員への負担が指摘された。その一方で、会員同士が互いの課題を理解・支援し合うこと、およびそのために「チームで楽しむ」活動への発想転換することの重要性が指摘された。

したがって、団体内での相互支援関係醸成を促すことが継続支援に寄与するという可能性が示唆された。そして、支援関係を醸成するには、団体Bに見られるように、活動内容を工夫するなど活動方法を柔軟に捉えることが必要と思われる。さらに、例えば1名のコーディネーターが指摘するように、支援方法が適切でなかったために、継続が困難な会員の自尊心をかえって損ねてしまうこともある。そこで、認知機能低下など高齢期に起きがちな課題とそれへの対応方法を正しく理解することの重要性も明らかになった。

予備調査の結果を踏まえ本研究では、健康障害や家族介護などの多様なライフイベントがあっても、できるだけ長くボランティア活動を継続できる団体・グループの「雰囲気」を醸成することを目的とした研修プログラムを作成・実施した。特に、以下の3点を研修にて提示することを目指した。

- ①認知症や筋力低下など、高齢期の様々な問題とその対応方法について検討する。
- ②ボランティア活動継続の重要性を再確認する。
- ③ボランティアメンバー間で活動継続にむけた相互支援がおこなわれるような会の環境を醸成する。

2. 研修の効果

研究3により、団体Aでは続困難者に対するサポート提供の行動、および具体的な支援策の一つである「頻度を減らして継続することを支援すべき」との考えが有意に改善していた。したがって、研修終了後に継続困難者への配慮といった支援の提供で改善が見られる等、わずかではあるが研修の効果が見られた。研究4の役員・支援者を対象としたインタビュー調査でも、本研修の特にコミュニケーション論が会員間の相互支援や相手を配慮したコミュニケーションの意識付けに一定の影響を与えた可能性が指摘された。

一方で、活動場所への移動支援に関する指示が有意に低下する、現在のレベルで活動できるあいだのみ支援すべきという見解に対する支持率が有意に上昇するなど、ネガティブな効果が見られた。その一方で、本人の継続意向では、「現在のレベルを維持できる間だけ続けたい」において、「そう思う」と言う者の割合が有意傾向に減少した。

3. 団体・グループのソーシャル・キャピタルに応じた研修プログラムの実施

2 つの団体で、ベースライン時の団体特性および研修終了後の効果が異なっていたことを鑑みると、団体・グループのソーシャル・キャピタルに応じた研修内容を実施する必要があると考える。

研究 1 の高齢者ボランティア向け予備調査では団体 B では既に会員間の相互支援が行われる等、団体内のソーシャル・キャピタルが高い可能性が示唆された。研究 3 でも同様に、研修開始前のベースライン時の団体 A と団体 B の状況を検討した結果で、2 団体で違いが見られた。団体 B は、団体 A に比べ、活動を楽しみとする者が多い、活動に心理的な負担を感じる者が少ない傾向にあった。さらに、団体 A は、ネガティブサポート(イライラさせる、世話を焼き過ぎるなど)を受けていると考える者の割合が団体 B より有意に多かった。また、統計的な有意差は見られなかったものの、仲間からサポートを受けている(気を配ってくれる)と感じている者の割合が団体 B にてより多かった。さらに、知覚した会の支援体制においても、団体 B では、団体が「継続困難者が継続しやすい雰囲気ある」と知覚する者が多い傾向(有意傾向)が見られた。これらの結果を鑑みると、団体 B はより、仲間間の支援が多く、心理的負担を感じることなく活動を楽しめる、すなわち団体内のソーシャル・キャピタルが、団体 A に比べて高いことが示唆された。

支援者の内訳は、団体 A の役員 3 名(内、男性 1 名)、団体 B の役員 2 名(男性 2 名)と 70 代前半の会員 1 名(女性)である。団体 B に所属する 70 代前半の会員は、団体役員およびその他の会員から「支援者」として本研究のインタビュー対象者に紹介された。団体 A と団体 B で研修に対する評価が異なった。

研究 4 の役員・支援者を対象としたインタビュー調査では、団体 A からは、本研修の特にコミュニケーション論が会員間の相互支援や相手を配慮したコミュニケーションの意識付けに一定の影響を与えた可能性が指摘された。一方、既に相互支援が行われているが、その支援が行き詰まっている団体 B の役員と 70 代の会員からは、研修で得た知識を実際の活動に取り入れることに関してイメージができなかったとの指摘を得た。

したがって、団体内の相互支援やソーシャル・キャピタルが低いと思われる団体に対しては、本研修、特にコミュニケーション論はある程度の効果が見られると思われる。しかし、研究 4 で指摘されたように、会員間のコミュニケーション課題が表面化する前に研修を実施する、および数回の研修で行動や意識変容を起こすことは困難な事を鑑み継続的に実施するなど、研修実施時期や回数を検討していく必要性もある。

一方で、既に団体内で相互支援が行われているなどある程度のソーシャル・キャピタルがある団体では、研修で得た知識を実際の活動に取り入れることに関してイメージができなかったとの指摘を得た。そこで、例えば認知症症状とその対処方法に関する講座の後半を、その知識を実際の活動でどのように活かすかと言った具体的な方法論に応用するグループワークを実施するなどの工夫が必要である。

4. 継続支援の必要性の再考と普及啓発の必要性

研究 4 の不特定多数のボランティアグループ所属の者を対象としたインタビュー調査では、継続困難者支援に関する課題意識が低いことが明らかになった。さらに、趣味活動と異なり、ボランティア活動とはその団体が掲げる活動内容を遂行できる限りでおこなう活動であることから、それができなくなった場合はその人の状態にあった活動や責任を伴わない趣味活動へ移行するべきとのボランティア観が、研修後の行動や意識変容を阻んでいることも明らかになった。

このことは、継続が困難となった高齢者ボランティアの継続支援が、団体・グループが取り組むべき課題として捉えられていないこと、およびその必要性が十分に理解されていないことを示唆している。したがって、この課題に取り組む必要性の認識を促す普及啓発の促進が、第一に取り組むべきことであることも示唆された。

引用文献

¹⁾ 野中久美子、他. 健康課題を持つ高齢者ボランティアによる世代間交流プログラムの継続および引退に影響する要因の検討—多様な高齢者との世代間交流プログラムに向けての支援策の提言—. 日本世代間交流学会誌. 2013;1:19—33.

第3章 簡便なボランティア活動の質の維持・向上に資する評価指標の開発

第1節 研究の概要

(1) 研究の枠組み

本研究では、世代間交流研究者の Kaplan が提唱する「世代間交流事業における世代間関与の深さ尺度」(表 1-1)を理論的枠組みとして使用する。Kaplan(2002)は、「世代間交流における世代間関与の深さ」の重要性を指摘しており、世代間の接触が「深く」なるにつれて事業参加者に恩恵をもたらすとしている。同様の指摘は、他の世代間交流研究者も指摘しており、例えば杉山・倉岡(2006)は、一度疎遠となった世代と世代をつなぐには自然発生的でインフォーマルな交流のみでは不十分であり、熟慮された「仕掛け(プログラム)」を要した世代間交流事業の必要性を指摘している。村山ら(2012)は、世代間交流事業に参加経験のある中学生を対象に質問紙調査を実施し、高齢者との親密な世代間交流が、児童の社会的発達に影響することを明らかにしている。こうした知見をもとに、本研究では「世代間接触の深さ」を評定することが、世代間交流事業全体の評価につながると仮定した。

(2) 研究の方法

世代間交流分析のための尺度や指標の開発も盛んに行われてきた米国では、世代間交流事業を評価する指標として行動や会話を測度とした行動指標が開発されてきた。中でも、Newman and ら(1989)による Elder-Child Interaction Analysis(ECIA)は、世代間交流事業を評価する指標として多くの研究で使用されている。村山ら(2011)は、ECIA をもとに、日本における高齢者と児童の世代間交流の測定に適した「日本版世代間交流行動尺度」を作成している。

世代間交流事業は学校や高齢者施設とのような公共施設であることが多く、職員や対象者の負担やプライバシー保護などの点から観察法は現実的で有用な研究方法であると考えられる。しかしながら、これらの行動尺度は、一部の専門家専用のものであり、世代間交流事業を運営する施設職員やスタッフが容易に使用することは難しい。そのため、施設職員やスタッフが簡便に負担をかけずに、世代間交流におけるコミュニケーション(行動や会話)を観察することで、世代間交流事業を評価できる「世代間交流評価チェックリスト」を開発することが求められる(図 1-1)。そこで、本研究では、「日本版世代間交流行動尺度」(村山ら,2011)をもとに、世代間交流事業を通じた世代間交流事業のスタッフや職員用の「世代間交流評価チェックリスト」の開発を試みた。

表 1-1. Kaplan の「世代間交流における世代間関与の深さ」

交流度レベル	
低い	1 異世代のことについて学ぶ
	2 異世代グループと間接的に交流する
	3 お互いに合う
高い	4 1年に1度、もしくは定期的な交流活動
	5 試験的なプロジェクト
	6 継続的な世代間交流活動
	7 継続的かつ自然な世代間交流・世代間支援とコミュニケーション

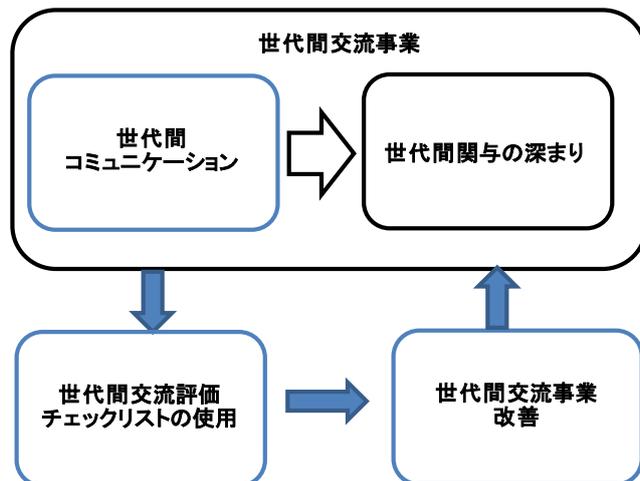


図 1-1. 世代間交流事業評価プロセス

(3) 研究の目的

本研究では、「世代間交流評価チェックリスト」作成に向けて、その目的を以下の 3 項目にまとめることができる。

- ① 日本版世代間交流行動尺度をもとに、親密な世代間交流を通して向上が見られた子どもの会話スキルやポジティブな態度を明らかにする。
- ② ①の結果をもとに作成した項目について、様々な世代間交流事業に適用し信頼性を検証する。
- ③ ①と②の結果をもとに、現場の職員およびスタッフのための「世代間交流評価チェックリスト」を作成する。

第2節 研究の方法

(1) 研究期間

平成 24 年 5 月～平成 25 年 3 月

(2) 研究対象

本研究では、小学生と地域高齢者(65 歳以上)との世代間交流について、a.教育支援型世代間交流(絵本の読み聞かせを通じた交流授業)、b.共同作業型世代間交流(おばけ屋敷作りを通じた世代間交流)、c.伝統継承型世代間交流(紙すき体験を通じた世代間交流)、を調査対象とした。それぞれの世代間交流事業の概要は以下に記す。

a.教育支援型世代間交流（絵本の読み聞かせを通じた交流授業） 川崎市 A 小学校において 2008 年度より実施されている高齢者による絵本の読み聞かせボランティア “REPRINTS”と小学校 6 年生との絵本の読み聞かせを通じた世代間交流事業である。同小学校では、国語科または総合的な学習の時間を利用して 6 年生と高齢者ボランティアとの交流授業を実施している。これは、高齢者ボランティアが児童に読み聞かせの実技指導を行い、その成果として 1 年生に読み聞かせの発表会を行うプログラムになっている。授業は、児童 5、6 名に対して高齢者ボランティア 1、2 名がチューターとして入り、グループワーク形式で進められる（全 6 回:7 時間）。高齢者ボランティアは、担当したグループの児童一人一人と話しながら読み聞かせ絵本の選書についてアドバイスをし、実演指導を行い発表会プログラムの相談にのる。交流授業は基本的に児童への指導は高齢者ボランティアに任されており、担当教諭は直接的な指導は行わない。交流授業の進行については、A 小学校の学校ボランティア・コーディネーターであり、“REPRINTS”に読み聞かせの実技指導を行っている Y 氏が教師とボランティアと調整および連携しながら進めている。2012 年度のスケジュールについては、表 2-1 に示す。

表 2-1. 2012 年度川崎市 A 小学校交流授業スケジュール

活動内容	クラス	回数	活動日程
自己紹介、選書	2組(介入群) 3組(介入群)	1回目	6月8日
	1組(対照群)		7月5日
読み聞かせの基礎チェック 読解と表現のチェック	2組(介入群) 3組(介入群)	2回目	6月12日
	1組(対照群)		7月12日
読み聞かせ指導	2組(介入群) 3組(介入群)	3回目	6月14日
	1組(対照群)		7月17日
発表会事前準備	2組(介入群) 3組(介入群)	4回目	6月22日
	1組(対照群)		7月17日
発表会本番	2組(介入群) 3組(介入群)	5回目	6月29日/7月3日
	1組(対照群)		7月19日



写真 1-1. 活動風景

b.共同作業型世代間交流(青葉おばけやしき☆プロジェクト) あおば学校支援ネットワークが主体となり2009年より横浜市青葉区で実施されている“おばけ屋敷”作りを通した世代間交流事業である。青少年が主体的に参加し異世代が互いに学びながら交流できる場を作ることを通して地域の活性化を図ることを目的に、青葉区内の小学生・中学生・高校生・大学生・大人を参加対象としている。8月下旬に行われる本番(1日間)を目指して、6月下旬から7月下旬(3日間程度)にかけてプロジェクトの企画を立て、8月上旬から8月中旬(5日間程度)にかけて大道具、小道具、衣装などの制作を行う。2012年度のスケジュールについては、表 2-2 に示す。

表 2-2. 2012年度青葉おばけやしき☆プロジェクトスケジュール

活動内容		回数	活動日程
企画	おばけ、セット、パフォーマンス等のデザイン及び企画	1回目	6月23日
		2回目	7月7日
		3回目	7月21日
制作	大道具、小道具、衣装等の作成及び会場の設営	4回目	8月1日
		5回目	8月5日
		6回目	8月19日
		7回目	8月22日
		8回目	8月25日
本番	おばけ役及び会場運営	9回目	8月26日



写真 1-2. 活動風景

c. 伝統継承型世代間交流(紙すき体験を通した世代間交流 川崎市立 A 小学校において、2006 年度より実施されている紙すき体験を通した世代間交流事業である。総合的な学習の時間を使って毎年5年生の児童を対象に地域の伝統文化である「和紙作り」を学習することを目的としている。地域のボランティアの方(いなだ・子どものふるさと会)の協力のもとに、児童たちは多摩川の河川敷まで行って和紙の元になる植物の楮(こうぞ)を探す作業からかわり、全部で6回の工程を経て和紙を作り上げる。2012 年度のスケジュールについては、表 2-3 に示す。

表 2-3. 2012 年度「紙すき」授業スケジュール

活動内容	回数	活動日程
コウゾ取り(多摩川にて)	1回目	10月25日
コウゾ煮・皮むき・黒皮干し	2回目	11月8日
黒皮取り・なでコウゾ干し	3回目	11月17日
煮熱・たたき・ミキサーかけ	4回目	11月24日
紙すき	5回目	11月29日
絵付け	6回目	12月6日



写真 1-3. 活動風景

(3) 研究の流れ

日本版世代間交流行動尺度(村山ら,2010)をもとに、親密な世代間交流を通して向上が見られた子どもの会話スキルやポジティブな態度を明らかにすることを目的に、川崎市 A 小学校で実施されている①教育支援型世代間交流(絵本の読み聞かせ)について観察調査および質問紙調査を実施する【研究 1】。

次いで、本尺度の信頼性を検討するために、横浜市青葉区で実施されている②共同作業型世代間交流(おばけ屋敷作り)、および川崎市 A 小学校で実施されている③伝統継承型世代間交流(紙すき体験)、について追試調査を行う【研究 2】。

最終的に、横浜市青葉区 B 小学校で実施されている世代間交流事業(昔遊び)に参加している教員およびスタッフに使用してもらい、その実行可能性について検証してもらい「世代間交流評価チェックリスト」を作成する【研究 3】。

本来ならば世代間交流事業の評価として児童だけでなく高齢者ボランティアの指標も検証することが望ましい。しかし、本研究で対象とする世代間交流事業に参加する高齢者ボランティアの多くは、世代間交流事業に参加する経験が豊富にあるとともに交流スキルもあるため、行動観察調査から評価することは難しい。そこで、本研究では、世代間交流事業に参加している児童に焦点をあてた。

(4)倫理的配慮

調査目的及び研究内容を学校長と担任教諭に口頭にて説明し、調査協力の同意を得た。保護者へは調査概要について説明文書を配布し了承頂き、対象者へは調査用紙に注意事項(匿名性の確保、参加は自由意志であること、不参加の場合不利益は生じない事等)を記載し、調査方法を担任教諭が説明し、用紙提出をもって研究参加の同意とした。本研究は、東京都健康長寿医療センター研究所にて倫理委員会の承認を得ている。

(5)各研究の詳細

研究の目的に応じて、以下の 3 つの研究(【研究 1】【研究 2】【研究 3】)を行った。

【研究 1】

日本版世代間交流行動尺度(村山ら,2010)をもとに、川崎市 A 小学校で実施されている教育支援型世代間交流(絵本の読み聞かせ)について①質問紙調査および②行動観察調査を実施した。

① 質問紙調査

対象:川崎市立 A 小学校の 6 年生児童 85 名(男児 42,女児 43)。

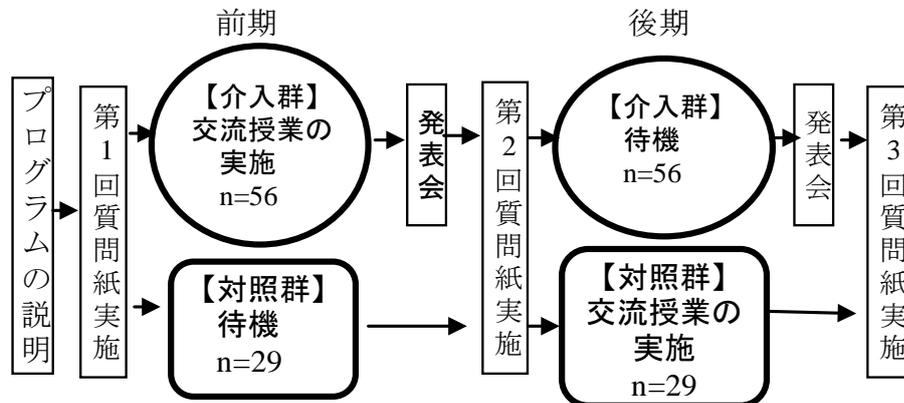
方法:自記式質問紙調査

調査時期:2012 年 6 月~7 月

調査項目:高齢者ボランティアとの親密な関係性については,対人関係の親密さを測定する 2 項目(①主観的親密感,②一体感)から捉えた。①主観的親密感は,高齢者ボランティアに対する主観的な親密さについて「まったく親しくない」から「とても親しい」まで 6 件法で回答を求めた。②一体感は,Aron,Aron,& Smollan(1992)により作成された IOS 尺度(Inclusion of Other in the Self Scale)を使用した。IOS 尺度は,2 つの円の重なり程度が,対象者と想定するパートナーとの関係の親密さをあらわし,7 段階で評定される。本尺度の信頼性と妥当性は確認されている。その他に、交流授業の内容に関する質問 5 項目 (①満足感、②達成感、③動機づけ、④読み聞かせ関心、⑤シニアボランティアとの会話)を尋ねた。

研究デザイン:調査は、質問紙調査により交流授業直前に第 1 回目の調査を実施し、交流授業後に直後に第 2 回目の調査を実施した。調査用紙の配布、回収は担任教諭が行った。研究デザインの概要を図 2-1 に示す。

図 2-1 世代間交流授業調査の概要



② 行動観察調査

調査時期:2012 年 6 月~7 月

調査対象:川崎市立 A 小学校の 6 年生児童 15 名(男児 6 名,女児 7 名)。調査前に、A 小学校の教員と研究所スタッフ間の協議により、研究所スタッフそれぞれが撮影対象とする高齢者ボランティアおよび児童を決定した。

調査場所:ビデオ撮影が可能な教室(児童会議室、教室、放送室)を調査場所とした。

調査方法: 研究所スタッフ3名が、それぞれの教室を担当し、2台のビデオカメラを固定設置した上で、作業開始から作業終了まで対象となる高齢者ボランティアおよび児童を撮影した。

分析方法: ビデオ映像から、20秒を1インターバルとする部分インターバル記録法を用い、作業以外の場面を抽出し、表情や会話の判別が可能な場面を選別した。日本版世代間交流行動尺度(村山ら, 2010)をもとに研究員3名が協議して分析の枠組みを決定し、訓練を受けた大学院生2名が独立してコーディング作業を行った。その結果、すべての項目で5割~6割以上の一致率が認められたが、両者ともに一致しなかった項目に関しては、両者が合議の上で最終判断を下す手続きをとった。分析対象場面としては、授業内容が類似している第2回と第4回を取り上げた。

【研究2】

研究1で検証された「日本版世代間交流行動尺度」を用いて、横浜市青葉区で実施されている共同作業型世代間交流(おばけ屋敷作り)、および川崎市A小学校で実施されている伝統継承型世代間交流(紙すき体験)、を対象に行動観察調査および質問紙調査を行った。

(1) 共同作業型世代間交流(おばけ屋敷作り)

① 質問紙調査

対象: 9歳から11歳までの参加児童12名(男児6名, 女児6名)。

方法: 自記式質問紙調査

調査時期: 2012年8月22日

調査方法: 研究員の監督のもとで、作業終了後に参加児童を集めて質問調査を実施した。

調査項目: 高齢者ボランティアとの親密な関係性については、対人関係の親密さを測定する2項目(①主観的親密感, ②一体感)から捉えた。①主観的親密感は、高齢者ボランティアに対する主観的な親密さについて「まったく親しくない」から「とても親しい」まで6件法で回答を求めた。②一体感は、Aron, Aron, & Smollan (1992)により作成されたIOS尺度(Inclusion of Other in the Self Scale)を使用した。IOS尺度は、2つの円の重なり程度が、対象者と想定するパートナーとの関係の親密さをあらわし、7段階で評定される。本尺度の信頼性と妥当性は確認されている。

② 行動観察調査

調査時期: 8月22日(制作作業)

調査対象: 参加高齢者3名、参加児童18名(男児14名, 女児4名)を対象とした。調査前に、A小学校のボランティアコーディネーターと研究所スタッフ間の協議により、研究所スタッフそれぞれが撮影対象とする高齢者ボランティアおよび児童を決定した。

調査方法: 研究所スタッフ3名が、それぞれ1台ビデオカメラを持ち、作業開始から作業終了まで対象となる高齢者ボランティアおよび児童を追跡して撮影した。

調査場所: おばけ屋敷作りが実施された地区センターの一室を調査場所とした。

分析方法: ビデオ映像から、20秒を1インターバルとする部分インターバル記録法を用い、作業以外の場面を抽出し、表情や会話の判別が可能な場面を選別した。【研究1】の結果をもとに修正した「日本版世代間交流

行動尺度」により、訓練を受けた大学院生 2 名が独立してコーディング作業を行った。両者とも一致しなかった項目に関しては、両者が合議の上で最終判断を下す手続きをとった。

(2) 伝統継承型世代間交流(紙すき体験)

① 質問紙調査

対象:川崎市立 A 小学校の 5 年生児童 94 名(男児 53,女児 41)。

方法:自記式質問紙調査

調査時期:2012 年 8 月 22 日

調査方法:事業の終了後に、授業内に各担任の監督のもとで質問紙を行った。

調査項目:高齢者ボランティアとの親密な関係性については、対人関係の親密さを測定する 2 項目(①主観的親密感,②一体感)から捉えた。①主観的親密感は、高齢者ボランティアに対する主観的な親密さについて「まったく親しくない」から「とても親しい」まで 6 件法で回答を求めた。②一体感は、Aron, Aron, & Smollan(1992)により作成された IOS 尺度(Inclusion of Other in the Self Scale)を使用した。IOS 尺度は、2 つの円の重なり程度が、対象者と想定するパートナーとの関係の親密さをあらわし、7 段階で評定される。本尺度の信頼性と妥当性は確認されている。

② 行動観察調査

調査時期:11 月 27 日(紙すき作業)

調査対象:川崎市立 A 小学校の 5 年生児童 25 名(男児 14,女児 11)を対象とした。調査前に、世代間交流事業運営者と研究所スタッフ間の協議により、研究所スタッフそれぞれが撮影対象とする高齢者ボランティアおよび児童を決定した。

調査場所:紙すき体験が実施された家庭科室を調査場所とした。

調査方法:研究所スタッフ 3 名が、それぞれ 1 台ビデオカメラを持ち、作業開始から作業終了まで対象となる高齢者ボランティアおよび児童を追跡して撮影した(図 1-3)。

分析方法:ビデオ映像から、20 秒を 1 インターバルとする部分インターバル記録法を用い、作業以外の場面を抽出し、表情や会話の判別が可能な場面を選別した。【研究 1】で修正した「日本版世代間交流行動尺度」をもとに研究員 3 名が協議して分析の枠組みを決定し、訓練を受けた大学院生 2 名が独立してコーディング作業を行った。両者とも一致しなかった項目に関しては、両者が合議の上で最終判断を下す手続きをとった。

【研究 3】

【研究 2】で作成された「世代間交流評価チェックリスト」を、横浜市青葉区 B 小学校で実施されている世代間交流事業(昔遊び)に参加している教員およびスタッフに使用してもらい、その実行可能性について検証してもらった。

調査時期:2013 年 2 月 19 日

調査対象:世代間交流事業(昔遊び)に参加している教員 3 名、高齢者ボランティア 3 名を対象とした。

調査方法:世代間交流事業(昔遊び)終了後に、世代間交流評価チェックリストおよびその課題(①チェックリストの簡便さ、②チェックリストの有効性、③チェックリストの用語や文言)について別紙で回答を求めた。

第3節 調査結果

第1項 研究1

1-1. 日本版世代間交流行動尺度の信頼性

無作為に抽出した児童4名分の行動観察データに関して、各項目(顔の向き・表情・会話の有無・会話内容・傾聴態度)についてそれぞれ κ 係数を算出した(表3-1)。 κ 係数の基準として.61～.80で「実質的に一致されている」とされており、本研究で用いた世代間交流事業評価尺度はある程度高い信頼性が認められたといえる。

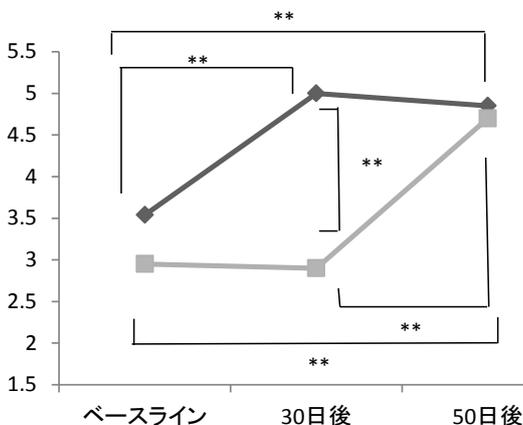
表3-1. 各項目の κ 係数

項目	係数
顔の向き	0.61
顔の表情	0.89
会話の有無	0.67
会話内容	0.54
傾聴態度	0.54
合計	0.67

1-2. 高齢者ボランティアに対する親密感の変化

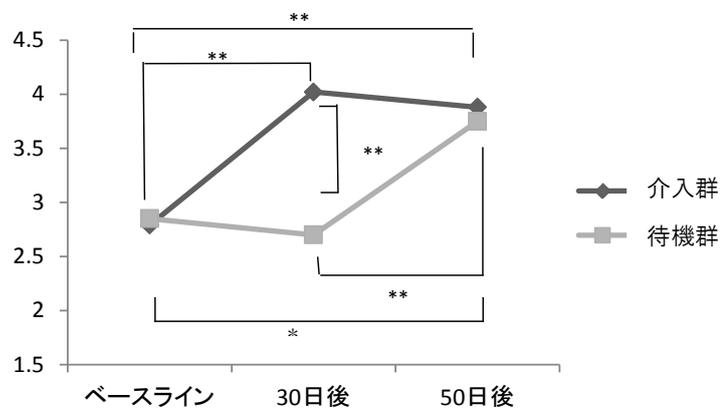
介入による主観的親密感,一体感,共感性の変化を検証するために,各得点(主観的親密感得点,IOS 尺度得点)を従属変数,期間(ベースライン,30日後,50日後)と群(介入群,待機群)を独立変数とした反復測定2要因分散分析を実施した。その結果,主観的親密感および一体感において「期間×群」の交互作用が認められた。単純主効果検定の結果,両得点ともに,介入群の交流授業終了後(30日後)において,待機群より介入群の得点が向上することが認められた(図3-1、図3-2)。また,待機群の交流授業終了後(50日後)には,介入群の得点の維持と待機群の得点の向上が認められた。

次いで、交流授業の内容に関する5項目(①満足感、②達成感、③動機づけ、④読み聞かせ関心、⑤シニアボランティアとの会話)を説明変数、主観的親密感得点を目的変数とした重回帰分析を行った。その結果、ボランティアとの会話頻度が主観的親密感得点に影響することが示された($\beta = .64$)。



* $p < .05$ ** $p < .01$

図3-1. 主観的親密感の変化



$p < .05$ ** $p < .01$

図3-2. 一体感の変化

1-3. 児童のシニアボランティアに対する行動・会話の変容

教育支援型世代間交流(絵本の読み聞かせ)を通じた、児童の高齢者に対する行動や会話の変化を明らかにするために、2回目と4回目の行動頻度および会話頻度の差異を検討するために対応のある t 検定を行った。分析に際しては、比率データのため、角変換を行った数値を使用した。その結果、高齢者に対する顔の向きを見ると $t(13)=1.92, p<.01$ となり、2回目よりも4回目の方が、有意に得点が高いことが示された。ポジティブな表情に関して見ると $t(13)=3.10, p<.01$ となり、2回目よりも4回目の方が、有意に得点が高いことが示された。会話頻度について見ると $t(13)=2.61, p<.05$ となり、2回目よりも4回目の方が、有意に得点が高いことが示された。

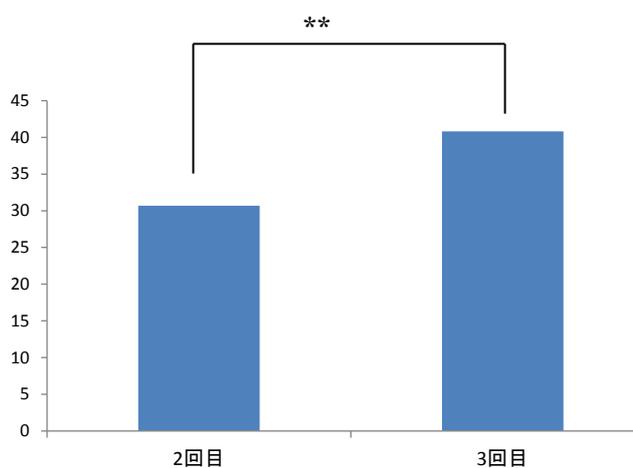


図 3-3. 高齢者に対する顔の向き

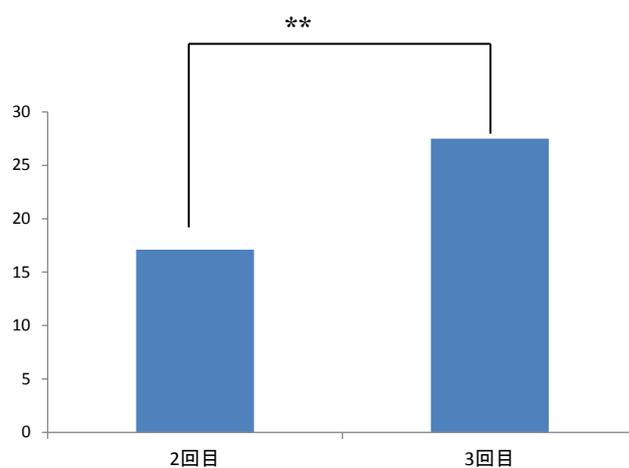


図 3-4. ポジティブな表情

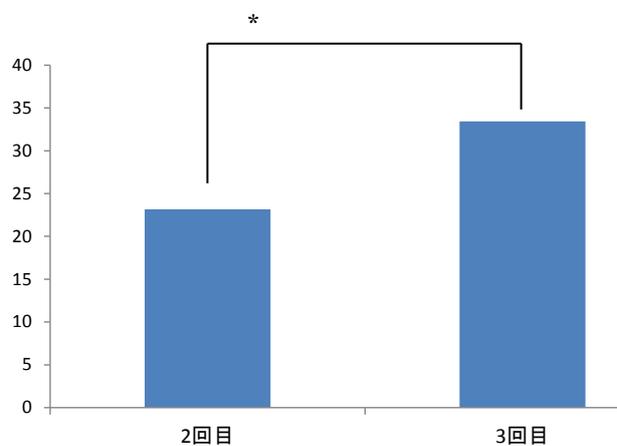


図 3-5. 会話の頻度

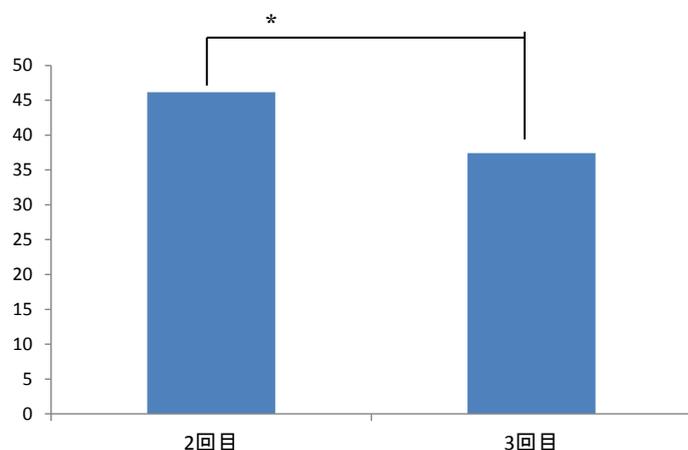


図 3-6. 傾聴時の無言

* $p<.05$ 、** $p<.01$

第2項 研究2

2-1. 世代間交流3類型(①教育支援型世代間交流, ②共同作業型世代間交流, ③伝統継承型世代間交流)間の高齢者に対する親密感の比較

世代間交流3類型(①教育支援型世代間交流, ②共同作業型世代間交流, ③伝統継承型世代間交流)における事業終了後の児童の高齢者に対する親密感を比較する目的に、交流類型を独立変数とし、主観的親密感得点およびIOS尺度得点を従属変数とする一元配置の分散分析を行った(図3-7; 図3-8)。その結果、それぞれに有意差が認められた(主観的親密感得点: $F(2,185)=15.39, p<.01$; IOS得点: $F(2,185)=24.90, p<.01$)。Tukeyを用いて多重比較を行ったところ、主観的親密感得点では、②共同作業型世代間交流が、①教育支援型世代間交流および③伝統継承型世代間交流よりも得点が有意に高かった(②>①≥③)。IOS尺度得点については、②共同作業型世代間交流がおよび①教育支援型世代間交流が、③伝統継承型世代間交流よりも得点が有意に高かった(②>①≥③)。

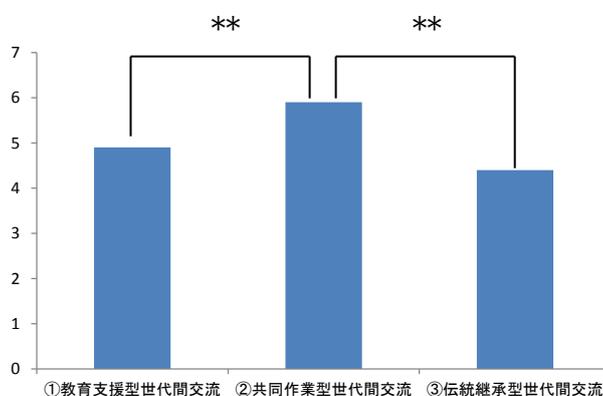


図3-7. 主観的親密感の比較

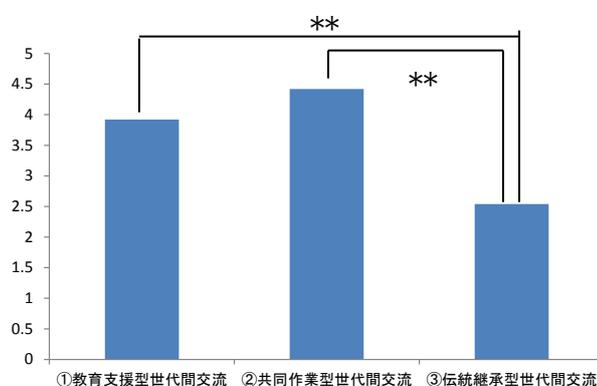


図3-8. IOS得点の比較

* $p<.05$ 、** $p<.01$

2-2. 世代間交流3類型(①教育支援型世代間交流, ②共同作業型世代間交流, ③伝統継承型世代間交流)間の行動・会話の比較

②共同作業を通じた世代間交流(おばけ屋敷作り) および③伝統継承を通じた世代間交流(紙すき体験)の行動観察調査を分析した後で、世代間交流3類型の行動および会話の差異を検討するために対応なしの1元配置分散分析を行った。分析に際しては、比率データのため、角変換を行った数値を使用した。

その結果、高齢者に対する顔の向きについて見ると $F(2,55)=27.78, p<.00$ となり、有意差が認められた(図3-7)。多重比較を行ったところ、①教育支援型世代間交流が、②共同作業型世代間交流および③伝統継承型世代間交流よりも得点が有意に高かった(①>②≥③)。ポジティブな表情に関して見ると $F(2,55)=21.25, p<.00$ となり、有意差が認められた(図3-8)。多重比較を行ったところ、教育支援型世代間交流が、共同作業型世代間交流および伝統継承型世代間交流よりも得点が有意に高かった(①>②≥③)。会話の有無について見ると $F(2,55)=17.38, p<.00$ となり、有意差が認められた(図3-9)。多重比較を行ったところ、①教育支援型世代間交流および②共同作業型世代間交流が、③伝統継承型世代間交流よりも得点が有意に高かった(①≥②>③)。自発的な発言について見ると $F(2,55)=5.46, p<.01$ となり、有意差が認められた(図3-10)。多重比較を行ったところ、教育支援型世代間交流が、共同作業型世代間交流および伝統継承型世代間交流よりも

得点が有意に高かった(①>②≥③)。傾聴時のうなづきに関して、 $F(2,55)=47.77$ $P<.01$ となり、有意差が認められた(図 3-11)。多重比較を行ったところ、教育支援型世代間交流が、共同作業型世代間交流および伝統継承型世代間交流よりも得点が有意に高かった(①>②≥③)。

以上の結果をまとめると、①教育支援型世代間交流は、②共同作業を通した世代間交流(おばけ屋敷作り)および③伝統継承を通した世代間交流(紙すき体験)に比べて、児童と高齢者とのコミュニケーションが頻繁にあるとともに、親密な交流を行っていることが示された。

ただし、本結果で示された違いは、それぞれの世代間交流事業の目的や内容によるものと考えられる。実際に、②共同作業を通した世代間交流(おばけ屋敷作り)では様々な世代を含めた自由な交流が行われており、③伝統継承を通した世代間交流(紙すき体験)では、紙すきの作業自体が目的になっている。そのため、本研究で検証してきた「世代間交流事業行動尺度」の各項目について、学校現場における①教育支援型世代間交流の評定に適した指標として捉え、教育支援型世代間交流用と位置づけ「世代間交流評価チェックリスト(仮)」を作成することにした。

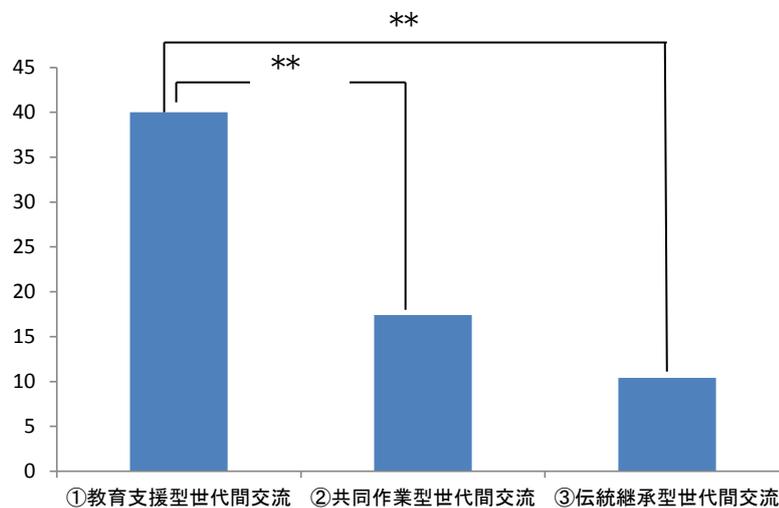


図 3-7. 高齢者に対する顔の向きと比較 ** $p<.01$

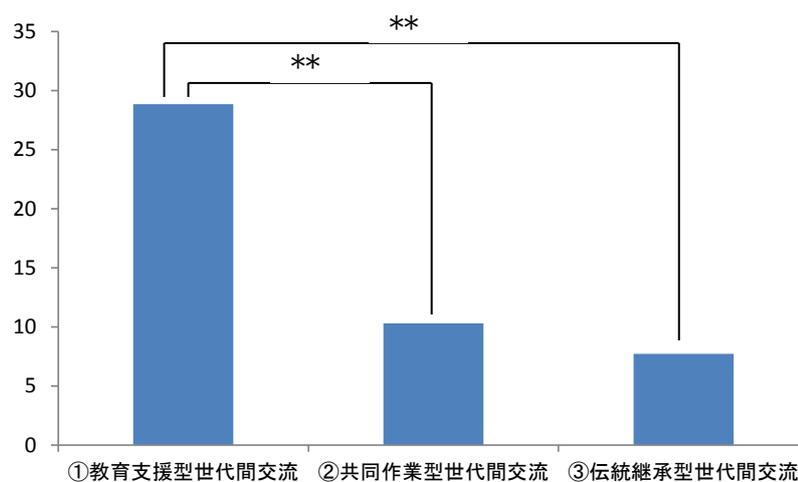


図 3-8. ポジティブな表情の比較 ** $p<.01$

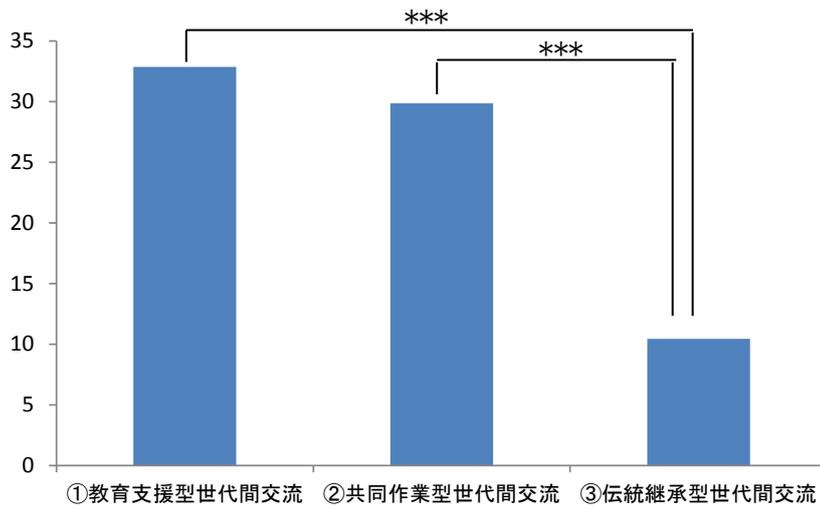


図 3-9. 会話頻度の比較

** $p < .01$

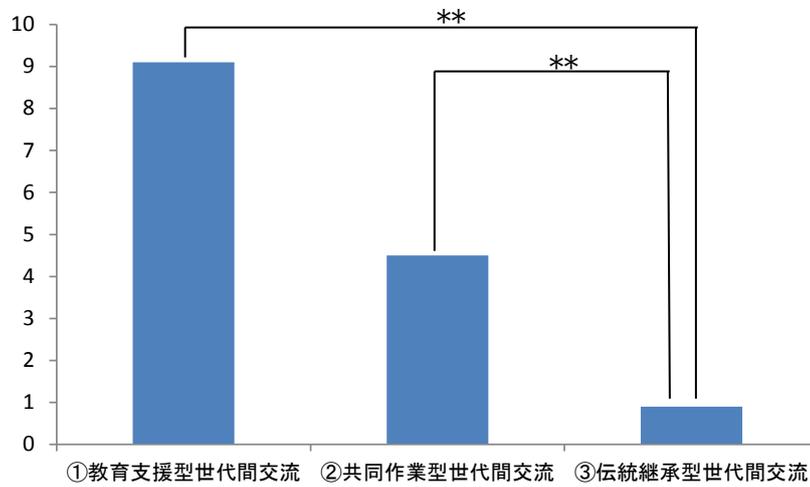


図 3-10. 自発的な発言

** $p < .01$

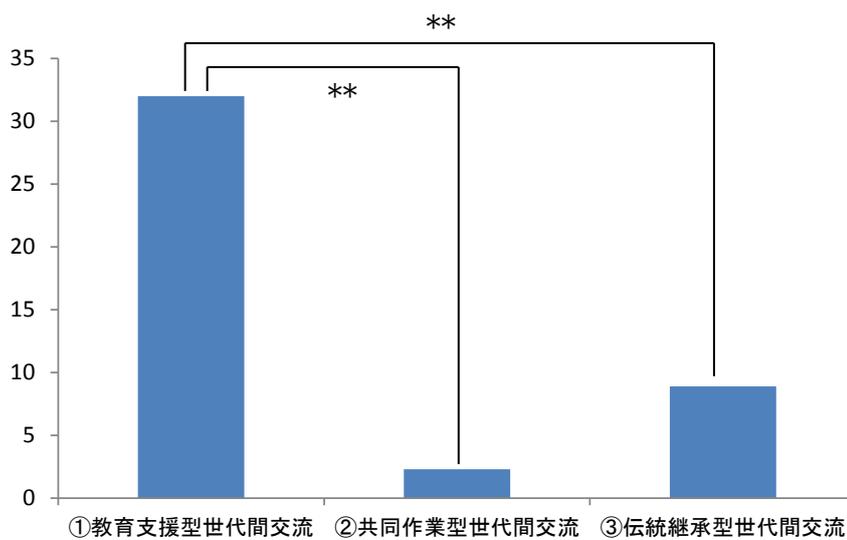


図 3-11. 傾聴時のうなづき

** $p < .01$

第3項 研究3

3-1. 世代間交流評価チェックリストの実行可能性の検証

【研究2】で作成した世代間交流評価チェックリスト(仮)について、横浜市青葉区B小学校で実施されている世代間交流事業(昔遊び)に参加している教員3名および高齢者ボランティア3名に使用してもらい、その実行可能性について検証してもらった。具体的に、本事業の最終日(2月19日)の世代間交流事業終了後に、世代間交流評価チェックリストへの記入およびその課題について別紙で回答を求め、回答後に郵送で送ってもらった。最終的に、教員3名および高齢者ボランティア1名から返信を受けた。世代間交流評価チェックリストの課題については、表3-2に示したとおりである。これらの課題を考慮した上で、世代間交流授業チェックリスト最終版を作成した。

表3-1. 青葉区B小学校での昔遊びスケジュール

回目	日にち	時間	内容
第1回目	2月4日	3-4時限(10:40~12:00)	
第2回目	2月8日	3-4時限(10:40~12:00)	
第3回目	2月12日	3-4時限(10:40~12:00)	コマ回し、けん玉、ベーゴマ、おはじけ、メンコ、羽根つき、あやとり等
第4回目	2月15日	3-4時限(10:40~12:00)	
第5回目	2月19日	3-4時限(10:40~12:00)	

表3-2. 提出された課題とそれに対する改善点

課題	改善点
回答項目が分かりづらい	➡ 書式・形式の修正
調査対象が分かりづらい	➡ 回答項目の見直し、説明文の付与
番号をふった方が良い	➡ 各項目に番号を付与
事業内容によってはあてはまらない項目もある	➡ 項目内容の見直し・修正、説明文の付与

第4節 まとめ

本研究では、世代間交流 3 類型(①教育支援型世代間交流事業、②共同作業型世代間交流事業、③伝統継承型世代間交流事業)を対象に、行動観察調査および質問紙調査を実施することで、信頼性および妥当性が検証された世代間交流事業を評価するための測度「世代間交流評価チェックリスト」を作成するに至った(巻末資料2参照)。

このチェックリストは、教育支援を目的とした小学生向けの世代間交流事業を対象としており、世代間交流事業を運営する教員やスタッフが使用することを想定して作成された。このチェックリストでは、児童の高齢者に対する会話の親密さおよび児童の高齢者に対する態度の親密さを評定することで、世代間交流事業全体の評価ができるとともに、世代間交流事業の改善に向けた方策を検討することができる。

今後、このチェックリストが活用されることで、世代間交流事業の運営者あるいはスタッフにより世代間交流事業が簡便に評価でき、持続的な世代間交流事業の創造につながることを期待される。

【参考文献】

杉岡さとる・倉岡正高 (2006). 今、なぜ世代間交流なのか, 社会教育, 63(1), 30-33.

Newman, S., & Onawola, R. (1989). The ECIA: Elder/Child Interaction Analysis, Generation Together, University of Pittsburgh Center for Social and Urban Research, Pittsburgh, PA, Unpublished Manuscript.

村山陽・藤原佳典・安永正史ほか (2011). 日本版世代間交流行動尺度の作成, 日本世代間交流学会誌, 1, 27-37.

村山陽・安永正史・大場宏美ほか (2012). 小学生時の世代間交流が中学入学後の地域交流参加意識に及ぼす影響-絵本の読み聞かせ高齢者ボランティア REPRINTS の実践報告から, 老年社会科学, 34(3), 382-393.

村山陽・竹内瑠美・大場宏美ほか (2013). 世代間交流事業に対する社会的関心とその現状, 日本公衆衛生雑誌, 60(3), 138-145.

＜1

2012 年 9 月 りずゆくとボランティア
 りずゆくとネットワーク
 「これからのグループ活動」に関するアンケート

地区
多摩区

* 本枠内にお名前・記入日をお書き下さい。

お名前
様

記入日	2012 年	月	日
-----	--------	---	---

***ご記入上の注意**

- ◆ アンケートは、8 ページまであります。
- ◆ 判断がつきにくい場合でも、あまり深く考え込まず、最も近いものを選んでください。
- ◆ 回答に欠陥があると判定が出ない場合がありますので、すべての質問に回答下さい。
- ◆ よく似た設問やあいまいな表現があり、回答しにくい場合もありますが、著作権などの関係上内容を変更できないため、ご了承ください。

本研究事業は、文部科学省委託事業「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究として実施しております。

ご記入の上、12 月例会にお持ちください

問1. あなたは「りずゆくと」に参加することでどのような効果を得たと感じますか、それぞれ、あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	非常に悪い	悪い	どちらでもない	良い	非常に良い
1. 仲の良い友達ができた	1	2	3	4	5
2. 活動そのものが楽しめた	1	2	3	4	5
3. 人に対して思いやる心が増えた	1	2	3	4	5
4. 活動を通じて喜びや感動を経験した	1	2	3	4	5
5. 対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強に なっている	1	2	3	4	5
6. 必要とされていることが実感でき自信につながった	1	2	3	4	5
7. やりがいがあった	1	2	3	4	5
8. 対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた	1	2	3	4	5
9. 気持ちの充足感が生まれた	1	2	3	4	5
10. 「ちと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた	1	2	3	4	5
11. 活動が生活の中で重要な部分となり、自分のものとなった	1	2	3	4	5
12. 新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった	1	2	3	4	5
13. 自分ができることで社会と関わり、人の役に立つことができた	1	2	3	4	5
14. 対象者の幸福・安寧のための新たな目標ができた	1	2	3	4	5
15.人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた	1	2	3	4	5
16. 日常生活の中で人との距離が好ましい方向に変わった	1	2	3	4	5

問2. あなたの難関体験は？（あてはまる番号1つに○をつけて下さい）

- | | |
|----------|------------|
| 1. 非常に良い | 4. あまり良くない |
| 2. とても良い | 5. 良くない |
| 3. 良い | |

問3. 現在の「リソりんど」活動におけるあなたの状況についてお答えください。次の(1)から(6)の項目について、あなたは「リソりんど」ボランティアから、どのくらい支援を受けられているか、思いますか。あてはまる番号に○をしてください。

(1) 「リソりんど」の仲間が、あなたの心配ごとや悩みごとをどれくらい聞いてくれますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(2) 「リソりんど」の仲間は、どのくらいあなたに気を配ったり、思いやりを示してくれたいですか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(3) あなたは、「リソりんど」の仲間の心配ごとや悩みごとを、どのくらい聞いてあげますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(4) あなたは、「リソりんど」の仲間についてどこがあったとき、どのくらい、困ったり、悩んだりしてあげますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(5) 「リソりんど」の仲間が、あなたをいらいらさせたり、怒らせたりすることはどのくらいありますか。

1. いつも	4. あまり
2. だいたい	5. 全く
3. ときどき	

(6) 「リソりんど」の仲間が、あなたに世話をやきすぎたり余計なお世話をすることはどのくらいありますか。

1. いつも	4. あまり
2. だいたい	5. 全く
3. ときどき	

問4. あなたの現在の活動状況についてお答えください。

(1) 自分の体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または 今までと同じように活動することが難しい状況ですか。

1. はい	2. いいえ
-------	--------

問5～

(2) 現在、あなたの活動グループ（「リソりんど・かわさき」内のグループ）の仲間は、あなたが活動を続けられるようにするためにどのくらい声をかけたり、気を配ったりしてくれていますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

問5. あなたの活動グループ（「リソりんど・かわさき」内のグループ）についてお答えください。

(1) 現在、あなたのグループの仲間に体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または今までと同じように活動することが難しい状況の人がいますか。

1. いる	2. いない
-------	--------

問6～

(2) あなたは、その人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたり、気を配ったりしていますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

問6. あなたの日常生活において「リソりんど」はどの程度、楽しみになっていますか。

1. かなり楽しみになっている	4. あまり楽しみになっていない
2. まあまあ楽しみになっている	5. 全く楽しみになっていない
3. どちらともいえない	

問7. あなたの日常生活において、“リズリンド”活動にどの程度、心理的な負担を感じますか。

1. かなり負担	3. あまり負担ではない
2. まあまあ負担	4. 全く負担ではない

問8. あなたの日常生活において、“リズリンド”活動にどの程度、身体的な負担を感じますか。

1. かなり負担	3. あまり負担ではない
2. まあまあ負担	4. 全く負担ではない

問9. あなたは今後、どの程度まで“リズリンド”活動を続けたいですか。

	非常に思わない	それほど思わない	ちょうどいい	それほど思う	非常に思う
(1) グループの仲間に活動場所への主催や、スケジュールの確認をサポートしてもらい、できる限り活動を続けたい	1	2	3	4	5
(2) 給本は読まずに、子どもとの交流や手遊びだけでも、活動内容を工夫して活動を続けたい	1	2	3	4	5
(3) 給本の読み聞かせの活動頻度を減らして、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(4) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(5) 定例会だけでも参加したい	1	2	3	4	5
(6) 給本の読み聞かせ活動場所を増やして、活動を続けたい	1	2	3	4	5

問10. あなたが“リズリンド”の活動を続ける中で、以下のような状況になった場合を想定して、お答えください。

(1). **もし仮に**、あなたが体調不良や家族の介護などで、“リズリンド”を今までと同じように活動することが困難になったとき、活動を続けられるようにあなたの活動グループ（「リズリンド・かわさき」内のリズグループ）の仲間からの支援を望みますか。

1. とても望む	4. あまり望まない
2. まあまあ望む	5. 全く望まない
3. どちらでもない	

その理由

(2). **もし仮に**、あなたが体調不良や家族の介護などで、“リズリンド”を今までと同じように活動することが困難になったとき、活動グループ（「リズリンド・かわさき」内のリズグループ）の仲間は、あなたが活動を続けられるように助けてくれると願いますか。

1. 非常にそう思う	4. そう思わない
2. そう思う	5. 全くそう思わない
3. どちらでもない	

その理由

(3). **もし仮に**、あなたの活動グループ（「リズリンド・かわさき」内のリズグループ）の仲間に体調不良や家族の介護などで活動を休みながら、または今までと同じように活動を行うことが困難な場合、あなたはその人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたリ気を配ったりしてあげたいと思いますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

その理由

問11. あなたが「りぶのんど」活動を続けたい理由や動機はなんですか、それぞれ、あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	非常に思わない	思わない	どちらでもない	思う	非常に思う
(1) 喜んだりの楽しさだけである	1	2	3	4	5
(2) 人はお互いに助けあわねばならず、自分にもその義務がある	1	2	3	4	5
(3) 自分の持っている知識、技術を使う練習になる	1	2	3	4	5
(4) 余暇が有効に使える	1	2	3	4	5
(5) 人に喜んでもらえる	1	2	3	4	5
(6) 自己を再発見し、成長させることができる	1	2	3	4	5
(7) 社会の一員として当然のことだ	1	2	3	4	5
(8) 毎日の生活に充実感がでる	1	2	3	4	5
(9) 人や社会の役に立てる	1	2	3	4	5
(10) 自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる	1	2	3	4	5
(11) 友人を得ることができる	1	2	3	4	5
(12) 自分の知識、経験、技術を活かすことができる	1	2	3	4	5
(13) 他のボランティアと楽しく活動できる	1	2	3	4	5
(14) ボランティア仲間から支えてもらえる	1	2	3	4	5
(15) 活動を通じて積極的に社会参加できる	1	2	3	4	5
(16) 絵本を楽しむことができる	1	2	3	4	5
(17) 子どもたちとふれあえる	1	2	3	4	5
(18) 子どもたちの成長に役立てる	1	2	3	4	5
(19) 訪問先への責任・使命感を感じる	1	2	3	4	5
(20) 現在の自分の体力や状態に合わせた活動ができる	1	2	3	4	5
(21) 自分の健康（体力や物忘れなど）の維持に役立つ	1	2	3	4	5

問12 「りぶのんど・かわさき」全体のことについてお答えください。

(1) 体調不良や家族の介護などで休みがち または今までと同じように「りぶのんど」の活動をするのが困難になった会員がいたとき、そのような人が活動を続けやすい雰囲気があると思いますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 非常にそう思う | 4. そう思わない |
| 2. そう思う | 5. 全くそう思わない |
| 3. どちらでもない | |

(2) 体調不良や家族の介護などで休みがち または今までと同じように「りぶのんど」の活動をするのが困難になった会員がいたとき、各会員はそのような人が活動を続けられるように、どの程度支援するべきだと思いますか。

	非常に思わない	思わない	どちらでもない	思う	非常に思う
(1) グループの仲間が活動場所への往復や、スケジュールの確認をサポートするなどにより、できる限り活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(2) 絵本は読まずに、子どもとの交流や手遊びなど、活動内容を工夫してできるだけ活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(3) 絵本の読み聞かせ活動頻度を減らして、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(4) 活動場所を近隣にして、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(5) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(6) 定例会の参加だけでも勧めるべき	1	2	3	4	5
(7) 特に何の支援もする必要はない	1	2	3	4	5

問13. たくさんの質問にお答えいただき、誠にありがとうございました。差し支えなければ、「りぶのんど」活動を続ける上でのご質問や必要な支援などについてご意見・ご感想をご自由にお書き下さい。

ご協力ありがとうございます。

問3. 現在の「リズリんど」活動におけるあなたの状況についてうかがいます。次の(1)から(6)の項目について、あなたは「リズリんど」ボランティアから、どのくらい支援を受けられているに思いますか。あてはまる番号に○をしてください。

(1) 「リズリんど」の仲間が、あなたの心配ごとや悩みごとをどれくらい聞いてくれますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(2) 「リズリんど」の仲間は、どのくらいあなたに気を配ったり、思いやりを示してくれたいですか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(3) あなたは、「リズリんど」の仲間の心配ごとや悩みごとを、どのくらい聞いてあげますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(4) あなたは、「リズリんど」の仲間についてどこがあったとき、どのくらい、馴染んだり、懇めたりしてあげますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(5) 「リズリんど」の仲間が、あなたをいらいらさせたり、怒らせたりすることはどのくらいありますか。

1. いつも	4. あまり
2. だいたい	5. 全く
3. ときどき	

(6) 「リズリんど」の仲間が、あなたに世話をやきすぎたり余計なお世話をすることはどのくらいありますか。

1. いつも	4. あまり
2. だいたい	5. 全く
3. ときどき	

問4. あなたの現在の活動状況についてうかがいます。
 (1) 自分の体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または 今までと同じように活動することが難しい状況ですか。

1. はい	2. いいえ
-------	--------

問5～

(2) 現在、あなたの活動グループ（「リズリんど・かわさき」内のグループ）の仲間は、あなたが活動を続けられるようにするためにどのくらい声をかけたり、気を配ったりしてくれていますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

問5. あなたの活動グループ（「リズリんど・かわさき」内のグループ）についておうかがいします。
 (1) 現在、あなたのグループの仲間に体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または今までと同じように活動することが難しい状況の人がいますか。

1. いる	2. いない
-------	--------

問6～

(2) あなたは、その人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたり、気を配ったりしていますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

問6. あなたの日常生活において「リズリんど」ほどの程度、楽しみになっていますか。

1. かなり楽しみになっている	4. あまり楽しみになっていない
2. まあまあ楽しみになっている	5. 全く楽しみになっていない
3. どちらともいえない	

問7. あなたの日常生活において、“リズリンド”活動にどの程度、心理的な負担を感じますか。

1. かなり負担	3. あまり負担ではない
2. まあまあ負担	4. 全く負担ではない

問8. あなたの日常生活において、“リズリンド”活動にどの程度、身体的な負担を感じますか。

1. かなり負担	3. あまり負担ではない
2. まあまあ負担	4. 全く負担ではない

問9. あなたは今後、どの程度まで“リズリンド”活動を続けたいですか。

	非常に思っています	そう思っています	どちらでもない	そう思いません	全く思いません
(1) グループの仲間に活動場所への主催や、スケジュールの確認をサポートしてもらい、できる限り活動を続けたい	1	2	3	4	5
(2) 給本は読まずに、子どもとの交流や手遊びだけでも、活動内容を工夫して活動を続けたい	1	2	3	4	5
(3) 給本の読み聞かせの活動頻度を減らして、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(4) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(5) 定例会だけでも参加したい	1	2	3	4	5
(6) 給本の読み聞かせ活動場所を増やして、活動を続けたい	1	2	3	4	5

問10. あなたが“リズリンド”の活動を続ける中で、以下のような状況になった場合を想定して、お答えください。

(1). **もし仮に**、あなたが体調不良や家族の介護などで、“リズリンド”を今までと同じように活動することが困難になったとき、活動を続けられるようにあなたの活動グループ（「リズリンド・かわさき」内のリズグループ）の仲間からの支援を望みますか。

1. とても望む	4. あまり望まない
2. まあまあ望む	5. 全く望まない
3. どちらでもない	

その理由

--

(2). **もし仮に**、あなたが体調不良や家族の介護などで、“リズリンド”を今までと同じように活動することが困難になったとき、活動グループ（「リズリンド・かわさき」内のリズグループ）の仲間は、あなたが活動を続けられるように助けてくれると願いますか。

1. 非常にそう思う	4. そう思わない
2. そう思う	5. 全くそう思わない
3. どちらでもない	

その理由

--

(3). **もし仮に**、あなたの活動グループ（「リズリンド・かわさき」内のリズグループ）の仲間に体調不良や家族の介護などで活動を休みながら、または今までと同じように活動を行うことが困難な状況になったとき、あなたはその人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたリ気を配ったりしてあげたいと思いますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

その理由

--

問11. あなたが「りぷりんど」活動を続けたい理由や動機はなんですか、それぞれ、あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	非常に思わない	思わない	どちらでもない	思う	非常に思う
(1) 喜んだりの楽しさだけである	1	2	3	4	5
(2) 人はお互いに助けあわねばならず、自分にもその義務がある	1	2	3	4	5
(3) 自分の持っている知識、技術を使う練習になる	1	2	3	4	5
(4) 余暇が有効に使える	1	2	3	4	5
(5) 人に喜んでもらえる	1	2	3	4	5
(6) 自己を再発見し、成長させることができる	1	2	3	4	5
(7) 社会の一員として当然のことだ	1	2	3	4	5
(8) 毎日の生活に充実感がでる	1	2	3	4	5
(9) 人や社会の役に立てる	1	2	3	4	5
(10) 自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる	1	2	3	4	5
(11) 友人を得ることができる	1	2	3	4	5
(12) 自分の知識、経験、技術を活かすことができる	1	2	3	4	5
(13) 他のボランティアと楽しく活動できる	1	2	3	4	5
(14) ボランティア仲間から支えてもらえる	1	2	3	4	5
(15) 活動を通じて積極的に社会参加できる	1	2	3	4	5
(16) 絵本を楽しむことができる	1	2	3	4	5
(17) 子どもたちとふれあえる	1	2	3	4	5
(18) 子どもたちの成長に役立てる	1	2	3	4	5
(19) 訪問先への責任・使命感を感じる	1	2	3	4	5
(20) 現在の自分の体力や状態に合わせた活動ができる	1	2	3	4	5
(21) 自分の健康（体力や物忘れなど）の維持に役立つ	1	2	3	4	5

問12 「りぷりんど・かわさき」全体のことについてお答えください。

(1) 体調不良や家族の介護などで休みがち または今までと同じように「りぷりんど」の活動をするのが困難になった会員がいたとき、そのような人が活動を続けやすい雰囲気があると思いますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 非常にそう思う | 4. そう思わない |
| 2. そう思う | 5. 全くそう思わない |
| 3. どちらでもない | |

(2) 体調不良や家族の介護などで休みがち または今までと同じように「りぷりんど」の活動をするのが困難になった会員がいたとき、各会員はそのような人が活動を続けられるように、どの程度支援するべきだと思いますか。

	非常に思わない	思わない	どちらでもない	思う	非常に思う
(1) グループの仲間が活動場所への往復や、スケジュールの確認をサポートするなどにより、できる限り活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(2) 絵本は読まずに、子どもとの交流や手遊びなど、活動内容を工夫してできるだけ活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(3) 絵本の読み聞かせ活動頻度を減らして、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(4) 活動場所を近隣にして、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(5) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(6) 定例会の参加だけでも勧めるべき	1	2	3	4	5
(7) 特に何の支援もする必要はない	1	2	3	4	5

問 13. たくさんの質問にお答えいただき、誠にありがとうございました。差し支えなければ、「りぷりんど」活動を続ける上でのご質問や必要な支援などについてご意見・ご感想をご自由にお書き下さい。

ご協力ありがとうございます。

2013 年 2 月 りぶりとネットフォーラム
 りぶりとネットフォーラム研修
 「これからのグループ活動の応援講座」に関するアンケート

地区
多摩区

* 本枠内にお名前・記入日をお書き下さい。

お名前	記入日
様	2013 年 月 日

- *ご記入上の注意**
- ◆ りぶりと・かわさきの会員の皆様にご回答をお願いします。研修会にご参加されなかった方も、ご回答をお願いします。
 - ◆ アンケートは 7 ページまであります。
 - ◆ 判断がつきにくい場合でも、あまり深く考え込まず、最も近いものを選んでください。回答に欠損があると判定が出ない場合がありますので、すべての質問に回答下さい。
 - ◆ よく似た疑問やあいまいな表現があり、回答しにくい場合もありませんが、著作権などの関係上内容を変更できないため、ご了承ください。

- *アンケートの返送方法**
- ◆ ご記入いただいたアンケート用紙は、2月19日までに別添えの封筒に入れ、下記までご返送をお願いします。

返送先・問い合わせ先
 東京都健康長寿医療センター研究所（東京都老人総合研究所）
 社会参加と地域保健研究チーム
 野中久美子・大塚宏美
nonaka@rmlc.or.jp
 03-3964-3241 (内線 3016)

問1. あなたの履修状態は？（**あてはまる番号1つに○**をつけて下さい）

- | | |
|----------|------------|
| 1. 非常に良い | 4. あまり良くない |
| 2. とても良い | 5. 良くない |
| 3. 良い | |

問2. あなたは、今回の研修に参加しましたか、

第1回（2012年10月3日）	1. 参加した	2. 欠席した
第2回（2012年11月7日）	1. 参加した	2. 欠席した

すべて欠席の方は、問5へ

問3. 今回の研修は、あなたが活動を継続することにどの程度、役に立ちましたか。また、差し支えなければ、そのようにお考えになった理由をお書きください。

- | | |
|-------------|---------------|
| 1. とても役立った | 3. あまり役立たなかった |
| 2. まあまあ役立った | 4. 全く役立たなかった |

その理由

問4. 今回の研修は、あなたが継続しやすくなる発想をつくりだどの程度、役に立ちましたか。また、差し支えなければ、そのようにお考えになった理由をお書きください。

- | | |
|-------------|---------------|
| 1. とても役立った | 3. あまり役立たなかった |
| 2. まあまあ役立った | 4. 全く役立たなかった |

その理由

問5. 現在の「リソりんど」活動におけるあなたの状況についてお答えください。次の(1)から(6)の項目について、あなたは「リソりんど」ホラントイアから、どのくらい支援を受けられていると思いますか。おてはまる番号に○をしてください。

(1) 「リソりんど」の仲間が、あなたの心配ごとや悩みごとをどれくらい聞いてくれますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(2) 「リソりんど」の仲間が、どのくらいあなたに気を配ったり、思いやりを示してくれられますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(3) あなたは、「リソりんど」の仲間の心配ごとや悩みごとを、どのくらい聞いてあげますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(4) あなたは、「リソりんど」の仲間についてどこがあったとき、どのくらい、馴染んだり、認めたりしてあげますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

(5) 「リソりんど」の仲間が、あなたをいらいらさせたり、怒らせたりすることはどのくらいありますか。

1. いくつち	4. あまり
2. だいたい	5. 全く
3. ときどき	

(6) 「リソりんど」の仲間が、あなたに世話をやきすぎたり余計なお世話をすることはどのくらいありますか。

1. いくつち	4. あまり
2. だいたい	5. 全く
3. ときどき	

問6. あなたの現在の活動状況についてお答えください。

(1) 自分の体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または 今までと同じように活動することが難しい状況ですか。

1. はい	2. いいえ
-------	--------

問7へ

(2) 現在、あなたの活動グループ（「リソりんど・かわさき」内のグループ）の仲間は、あなたが活動を続けられるようにするためにどのくらい声をかけたり、気を配ったりしてくれていますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

問7. あなたの活動グループ（「リソりんど・かわさき」内のグループ）についてお答えください。

(1) 現在、あなたのグループの仲間に体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または今までと同じように活動することが難しい状況の人がいますか。

1. いる	2. いない
-------	--------

問8へ

(2) あなたは、その人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたり、気を配ったりしていますか。

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

問8. あなたの日常生活において「リソりんど」はどの程度、楽しみになっていますか。

1. かなり楽しみになっている	4. あまり楽しみになっていない
2. まあまあ楽しみになっている	5. 全く楽しみになっていない
3. どちらともいえない	

問9. あなたの日常生活において、「リハビリ」活動にどの程度、心理的な負担を感じますか。

- | | |
|-----------|--------------|
| 1. かなり負担 | 3. あまり負担ではない |
| 2. まあまあ負担 | 4. 全く負担ではない |

問10. あなたの日常生活において、「リハビリ」活動にどの程度、身体的な負担を感じますか。

- | | |
|-----------|--------------|
| 1. かなり負担 | 3. あまり負担ではない |
| 2. まあまあ負担 | 4. 全く負担ではない |

問11. あなたは今後、どの程度まで「リハビリ」活動を続けたいですか。

	非常にそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
(1) グループの仲間に活動場所への往復や、スケジュールの確認をサポートしてもらい、できる限り活動を続けたい	1	2	3	4	5
(2) 給本は読まずに、子どもとの交流や手遊びだけでも、活動内容を工夫して活動を続けたい	1	2	3	4	5
(3) 給本の読み聞かせの活動頻度を減らして、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(4) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(5) 定例会だけでも参加したい	1	2	3	4	5
(6) 給本の読み聞かせ活動場所を撤やして、活動を続けたい	1	2	3	4	5

問12. あなたが「リハビリ」の活動を続ける中で、以下のような状況になった場合を想定して、お答えください。

(1) **もし仮に**、あなたが体調不良や家族の介護などで、「リハビリ」を今までと同じように活動することが困難になったとき、活動を続けられるようにあなたの活動グループ（「リハビリ」・「かわさき」内のリグループ）の仲間からの支援を望みますか。

- | | |
|--------------|------------|
| 1. とても望む | 4. あまり望まない |
| 2. まあまあ望む | 5. 全く望まない |
| 3. どちらともいえない | |
- その理由

(2) **もし仮に**、あなたが体調不良や家族の介護などで、「リハビリ」を今までと同じように活動することが困難になったとき、活動グループ（「リハビリ」・「かわさき」内のリグループ）の仲間は、あなたが活動を続けられるように助けてくれると思いますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 非常にそう思う | 4. そう思わない |
| 2. そう思う | 5. 全くそう思わない |
| 3. どちらでもない | |

その理由

(3) **もし仮に**、あなたの活動グループ（「リハビリ」・「かわさき」内のリグループ）の仲間に体調不良や家族の介護などで活動を休みがちな、または今までと同じように活動を行うことが困難な人がいたとき、あなたはその人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたり気を配ったりしてあげたいと思いますか。

- | | |
|----------|--------|
| 1. とてもよく | 4. あまり |
| 2. よく | 5. 全く |
| 3. まあまあ | |

その理由

問13. 「リハビリ」・「かわさき」全体のことについてお答えください。

(1) 体調不良や家族の介護などで休みがち、または今までと同じように「リハビリ」の活動をするのが困難になった会員がいたとき、そのような人が活動を続けやすい雰囲気があると思いますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 非常にそう思う | 4. そう思わない |
| 2. そう思う | 5. 全くそう思わない |
| 3. どちらでもない | |

(2) 体調不良や家族の介護などで休みがちなまたは今までと同じように“リハビリ”の活動をするのが困難になった会員がいたとき、各会員はそのような人が活動を続けられるように、どの程度支援するべきだと思いますか。

	非常じやないと思う	やや思う	じやないと思う	やや思う	全く思う
(1) グループの仲間が活動場所への往復や、スケジュールの確認をサポートするなどにより、できる限りの活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(2) 総本は読まずに、子どもとの交流や手遊びなど、活動内容を工夫してできるだけ活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(3) 総本の読み聞かせ活動頻度を減らして、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(4) 活動場所を近場にして、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(5) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(6) 定例会の参加だけでも勧めるべき	1	2	3	4	5
(7) 特に何の支援もする必要はない	1	2	3	4	5

問 14. あなたは今後 1 年間、リハビリと活動を継続するにどの程度、自信がありますか。

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1. 自信がある | 3. どちらかという自信がない |
| 2. どちらかという自信がある | 4. 自信がない |

問 15. 現在の“リハビリ”活動を続ける上で、課題や必要な支援などについてのご意見・ご感想を自由に書き下さい。また、必要と思われる研修などがありましたら、お知らせください。

たくさんの質問にお答えいただき、誠にありがとうございました。

2012 年 11 月

シニアのグループ活動に関するアンケート（音楽区）

※本校内に記入日をお書き下さい。

記入日	※氏名（ふりがな）
2012年 月 日	

***ご記入上の注意**

- ◆ アンケートは、8ページまであります。
- ◆ 判断がつきにくい場合でも、あまり深く考え込まず、最も近いものを選んでください。回答に矛盾があると判断が出ない場合がありますので、すべての質問に回答下さい。
- ◆ よく似た設問やあいまいな表現があり、回答しにくい場合もありますが、著作権などの関係上内容を変更できないため、ご了承ください。

ご記入の上、講座初日にお持ち下さい。

問1. 現在地域でグループ活動（ボラチアやサークル活動）をしていますか？（いずれかに○をして下さい）。

1. はい → ①全くしたことがない、②以前は活動をしていて、③以前は活動をしていない、④以前は活動をしていて、⑤以前は活動をしていない、⑥以前は活動をしていて、⑦以前は活動をしていて、⑧以前は活動をしていて、⑨以前は活動をしていて、⑩以前は活動をしていて、⑪以前は活動をしていて、⑫以前は活動をしていて、⑬以前は活動をしていて、⑭以前は活動をしていて、⑮以前は活動をしていて、⑯以前は活動をしていて、⑰以前は活動をしていて、⑱以前は活動をしていて、⑲以前は活動をしていて、⑳以前は活動をしていて、㉑以前は活動をしていて、㉒以前は活動をしていて、㉓以前は活動をしていて、㉔以前は活動をしていて、㉕以前は活動をしていて、㉖以前は活動をしていて、㉗以前は活動をしていて、㉘以前は活動をしていて、㉙以前は活動をしていて、㉚以前は活動をしていて、㉛以前は活動をしていて、㉜以前は活動をしていて、㉝以前は活動をしていて、㉞以前は活動をしていて、㉟以前は活動をしていて、㊱以前は活動をしていて、㊲以前は活動をしていて、㊳以前は活動をしていて、㊴以前は活動をしていて、㊵以前は活動をしていて、㊶以前は活動をしていて、㊷以前は活動をしていて、㊸以前は活動をしていて、㊹以前は活動をしていて、㊺以前は活動をしていて、㊻以前は活動をしていて、㊼以前は活動をしていて、㊽以前は活動をしていて、㊾以前は活動をしていて、㊿以前は活動をしていて、
2. いいえ → ①全くしたことがない、②以前は活動をしていて、③以前は活動をしていて、④以前は活動をしていて、⑤以前は活動をしていて、⑥以前は活動をしていて、⑦以前は活動をしていて、⑧以前は活動をしていて、⑨以前は活動をしていて、⑩以前は活動をしていて、⑪以前は活動をしていて、⑫以前は活動をしていて、⑬以前は活動をしていて、⑭以前は活動をしていて、⑮以前は活動をしていて、⑯以前は活動をしていて、⑰以前は活動をしていて、⑱以前は活動をしていて、⑲以前は活動をしていて、⑳以前は活動をしていて、㉑以前は活動をしていて、㉒以前は活動をしていて、㉓以前は活動をしていて、㉔以前は活動をしていて、㉕以前は活動をしていて、㉖以前は活動をしていて、㉗以前は活動をしていて、㉘以前は活動をしていて、㉙以前は活動をしていて、㉚以前は活動をしていて、㉛以前は活動をしていて、㉜以前は活動をしていて、㉝以前は活動をしていて、㉞以前は活動をしていて、㉟以前は活動をしていて、㊱以前は活動をしていて、㊲以前は活動をしていて、㊳以前は活動をしていて、㊴以前は活動をしていて、㊵以前は活動をしていて、㊶以前は活動をしていて、㊷以前は活動をしていて、㊸以前は活動をしていて、㊹以前は活動をしていて、㊺以前は活動をしていて、㊻以前は活動をしていて、㊼以前は活動をしていて、㊽以前は活動をしていて、㊾以前は活動をしていて、㊿以前は活動をしていて、

問2. あなたが関わっているボラチアやサークル活動（以後「グループ活動」）について出来る限りお答えください。複数ある場合は、ご自身にとって優先順位の高い（時間的、役割など基準は問いませんが）ものから3つまでお答えください。分類は次ページ「グループ活動分類表」の該当する番号をご記入下さい。

〈例〉グループ活動① 分類： 5 設立年月： 西暦 2005年 4月
 メンバー構成： 25人（うち男性 6人 女性 19人） メンバーの主な年齢層： 60代
 あなたの活動開始年月： 西暦 2006年4月～ あなたの役割： 代表（代表以外の役割・会員）

グループ活動② 分類： _____ 設立年月： 西暦 _____ 年 _____ 月 _____ 日
 メンバー構成： _____ 人（うち男性 _____ 人 女性 _____ 人） メンバーの主な年齢層： _____ 代
 あなたの活動開始年月： 西暦 _____ 年 _____ 月 _____ 日 あなたの役割： 代表・代表以外の役員・会員

グループ活動③ 分類： _____ 設立年月： 西暦 _____ 年 _____ 月 _____ 日
 メンバー構成： _____ 人（うち男性 _____ 人 女性 _____ 人） メンバーの主な年齢層： _____ 代
 あなたの活動開始年月： 西暦 _____ 年 _____ 月 _____ 日 あなたの役割： 代表・代表以外の役員・会員

※グループ活動分類表
 1. 子育て支援活動 2. 障がい者支援活動 3. 高齢者支援活動 4. 青少年支援活動 5. 学校支援活動 6. まちづくり 7. 環境 8. 防災・防犯 9. 国際理解・交流 10. その他（具体的に記入下さい）

問3. あなたは、グループ活動に参加することでどのような効果を得たと思いますか。それぞれ、あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

1. 中の良い友達ができ	1	2	3	4	5
2. 活動そのものが楽しめた	1	2	3	4	5
3. 人に対して思いやることが習慣ついた	1	2	3	4	5
4. 活動を通じて喜びや感動を経験した	1	2	3	4	5
5. 対象者や他のボラチアから様々なことを教えられる機会に なっている	1	2	3	4	5
6. 必要とされていることが実感でき自信につながった	1	2	3	4	5
7. やりがいを感じ生まれた	1	2	3	4	5
8. 対象者や他のボラチアなどと活動を共にする喜びを感じた	1	2	3	4	5
9. 気持ちの充足感が生まれた	1	2	3	4	5
10. 「ちよ〜したい」など自分自身を高める自覚が生まれた	1	2	3	4	5
11. 活動が生活の中で重要な部分となり、自分のものとなった	1	2	3	4	5
12. 新しい出会いがあり、人間関係の幅が広がった	1	2	3	4	5
13. 自分ができることで社会と関わり、人の役に立つことができた	1	2	3	4	5
14. 対象者の幸福・安楽のための新たな自覚ができた	1	2	3	4	5
15. 人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた	1	2	3	4	5
16. 日常生活の中で人との対面が好ましい方向に変わった	1	2	3	4	5

問4. あなたの健康状態は？（あてはまる番号1つに○をつけて下さい）

- | | |
|----------|------------|
| 1. 最高に良い | 4. あまり良くない |
| 2. とても良い | 5. 良くない |
| 3. 良い | |

問5. 現在関わられているグループ活動におけるあなたの状況についてうかがいます。次の(1)から(6)の項目について、あなたはグループのメンバーから、どのくらい支援を受けたいと思いますか。あてはまる番号に○をしてください。

(1). グループの仲間は、あなたの心配ごとや悩みごとをどれくらい聞いてくれますか。

- | | | | | |
|----------|-------|---------|--------|-------|
| 1. とてもよく | 2. よく | 3. まあまあ | 4. あまり | 5. 全く |
|----------|-------|---------|--------|-------|

(2). グループの仲間は、どのくらいあなたに気を配ったり、思いやりを示してくれますか。

- | | | | | |
|----------|-------|---------|--------|-------|
| 1. とてもよく | 2. よく | 3. まあまあ | 4. あまり | 5. 全く |
|----------|-------|---------|--------|-------|

(3). あなたは、グループの仲間の心配ごとや困りごとを、どのくらい聞いてあげますか。

- | | | | | |
|----------|-------|---------|--------|-------|
| 1. とてもよく | 2. よく | 3. まあまあ | 4. あまり | 5. 全く |
|----------|-------|---------|--------|-------|

(4). あなたは、グループの仲間につらいことがあったとき、どのくらい、励ましたり、慰めたりしてあげますか。

- | | | | | |
|----------|-------|---------|--------|-------|
| 1. とてもよく | 2. よく | 3. まあまあ | 4. あまり | 5. 全く |
|----------|-------|---------|--------|-------|

(5). グループの仲間は、あなたをいらいらさせたり、怒らせたりすることはどのくらいありますか。

- | | | | | |
|--------|---------|---------|--------|-------|
| 1. いつも | 2. だいたい | 3. ときどき | 4. あまり | 5. 全く |
|--------|---------|---------|--------|-------|

(6). グループの仲間は、あなたに世話をやきすぎたり余計な世話をすることはどのくらいありますか。

- | | | | | |
|--------|---------|---------|--------|-------|
| 1. いつも | 2. だいたい | 3. ときどき | 4. あまり | 5. 全く |
|--------|---------|---------|--------|-------|

問6. あなたの現在の活動状況についておうかがいします。

(1). 自分の体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または 今までと同じように活動することが難しい状況ですか。

- | | |
|-------|--------|
| 1. はい | 2. いいえ |
|-------|--------|

問7～

(2). 現在のグループの仲間は、あなたが活動を続けられるようにするためにどのくらい声をかけたり、気を配ったりしてくれていますか。

- | | |
|----------|--------|
| 1. とてもよく | 4. あまり |
| 2. よく | 5. 全く |
| 3. まあまあ | |

問7. あなたが活動しているグループについておうかがいします。

(1). 現在、あなたのグループの仲間に体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または今までと同じように活動することが難しい状況の人がいますか。

- | | |
|-------|--------|
| 1. いる | 2. いない |
|-------|--------|

問8～

(2). あなたは、その人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたり、気を配ったりしていますか。

- | | |
|----------|--------|
| 1. とてもよく | 4. あまり |
| 2. よく | 5. 全く |
| 3. まあまあ | |

問8. あなたの日常生活においてグループの活動はどの程度、楽しみになっていますか。

- | | |
|------------------|------------------|
| 1. かなり楽しみになっている | 4. あまり楽しみになっていない |
| 2. まあまあ楽しみになっている | 5. 全く楽しみになっていない |
| 3. どちらともいえない | |

問9. あなたの日常生活において、グループ活動にどの程度、心理的な負担を感じますか。

1. かなりの負担	3. あまり負担ではない
2. まあまあ負担	4. 全く負担ではない

問10. あなたの日常生活において、グループ活動にどの程度、身体的な負担を感じますか。

1. かなりの負担	3. あまり負担ではない
2. まあまあ負担	4. 全く負担ではない

問11. あと、どれくらいグループの活動を続けられると思いますか？

あと 年くらい

問12. あなたは今後、どの程度までグループ活動を続けたいですか。

	非常にとりまわらう	とりまわらう	とりまわらう	とりまわらう	かなりとりまわらう
(1) グループの中間に活動場所への往復や、スケジュールの確認をレポートしてもらい、できる限りの活動を続けたい	1	2	3	4	5
(2) 活動内容を工夫して活動を続けたい	1	2	3	4	5
(3) 活動頻度を減らして、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(4) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(5) 定例会、例会などだけでも参加したい	1	2	3	4	5
(6) 活動場所や機会を増やして、活動を続けたい	0	2	3	4	5

問13. あなたが活動を続ける中で、以下のような状況になった場合を想定して、お答えください。

(1) **もし仮に、あなたが体調不良や家族の介護などで、今までと同じように活動することが困難になったとき、活動を続けられるようにあなたの活動グループの仲間からの支援を望みますか。**

1. とても望む	4. あまり望まない
2. まあまあ望む	5. 全く望まない
3. どちらともいえない	

その理由

--

(2) **もし仮に、あなたが体調不良や家族の介護などで、今までと同じように活動することが困難になったとき、活動グループの仲間は、あなたが活動を続けられるように助けてくれると思いますか。**

1. 非常にそう思う	4. そう思わない
2. そう思う	5. 全くそう思わない
3. どちらでもない	

その理由

--

(3) **もし仮に、あなたの活動グループの中間に体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または今までと同じように活動を行うことが困難な人がいたとき、あなたはその人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたりの気配ったりしてあげたいと思いますか。**

1. とてもよく	4. あまり
2. よく	5. 全く
3. まあまあ	

その理由

--

問14. あなたが活動を続けたい理由や動機はありますか。それぞれ、**あてはまる番号1つに○**をつけて下さい。活動の性質上該当しない項目は、「該当しない」をお選び下さい。

	非継続的や中断的	その通り	むしろ増えたい	もっと増えたい	全く増えたい	増えたい
(1) 喜んだりの楽しんだりでできる	1	2	3	4	5	6
(2) 人とお互いに助けあわねばならず、自分にもその義務がある	1	2	3	4	5	6
(3) 自分の持っている知識、技術を使う練習になる	1	2	3	4	5	6
(4) 余暇が有効に使える	1	2	3	4	5	6
(5) 人に喜んでもらえる	1	2	3	4	5	6
(6) 自己を再発見し、成長させることができる	1	2	3	4	5	6
(7) 社会の一員として当然のことだ	1	2	3	4	5	6
(8) 毎日の生活に充実感がでる	1	2	3	4	5	6
(9) 人や社会の役に立てる	1	2	3	4	5	6
(10) 自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる	1	2	3	4	5	6
(11) 友人を得ることができると	1	2	3	4	5	6
(12) 自分の知識、経験、技術を生かすことができる	1	2	3	4	5	6
(13) 他のボランティアと楽しく活動できる	1	2	3	4	5	6
(14) ボランティア仲間から受けてもらえる	1	2	3	4	5	6
(15) 活動を通じて積極的に社会参加できる	1	2	3	4	5	6
(16) 子どもたちとふれあえる	1	2	3	4	5	6
(17) 子どもたちの成長に役立てると	1	2	3	4	5	6
(18) 訪問先への責任・使命感を感じる	1	2	3	4	5	6
(19) 現在の自分の体力や状態に合わせた活動ができる	1	2	3	4	5	6
(20) 自分の健康（体力や物忘れなど）の維持に役立つ	1	2	3	4	5	6

問15. 全体のことについてお答えをお願いします。

(1) 体調不良や家族の介護などで休みがち または今までと同じように活動をするのが困難になったメンバーがいたとき、あなたはどのような人が活動を続けられるように、どの程度支援するべきだと思いますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 非常にそう思う | 4. そう思わない |
| 2. そう思う | 5. 全くそう思わない |
| 3. どちらでもない | |

(2) 体調不良や家族の介護などで休みがち または今までと同じように活動をするのが困難になった委員がいたとき、委員はどのような人が活動を続けられるように、どの程度支援するべきだと思いますか。

	非継続的や中断的	その通り	むしろ増えたい	もっと増えたい	全く増えたい
(1) グループの仲間が活動場所への往復や、スケジュールの確認をサポートするなどにより、できる限りの活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(2) 活動内容を工夫してできるだけ活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(3) 活動頻度を減らして活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(4) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(5) 定例会の参加だけでも勤めるべき	1	2	3	4	5
(6) 特に何の支援もする必要はない	1	2	3	4	5

問16. 皆さんの質問にお答えいただき、誠にありがとうございました。差し支えなければ、活動を続ける上での課題や必要な支援などについてのご意見・ご感想を自由にお願いします。

ご協力ありがとうございます。

2012 年 12月

シニアのグループ活動に関するアンケート (青葉区) 第2回

※本枠内に記入日をお書き下さい。

記入日

※氏名 (ふりがな)

2012 年 月 日

***ご記入上の注意**

- ◆ アンケートは、8ページまであります。
- ◆ 判断がつきにくい場合でも、あまり深く考え込まず、最も近いものを選んでください。回答に欠陥があると判断が出ない場合がありますので、すべての質問に回答下さい。
- ◆ よく似た設問やあいまいな表現があり、回答しにくい場合もあると思いますが、著作権などの関係上内容を変更できないため、ご了承ください。

ご記入の上、12月27日(木)までにご郵送下さい。

問1. あなたは、グループ活動に参加することでどのような効果を得たと思いますか。それぞれ、あてはまる番号1つに○をつけて下さい。

	非常に多い	多い	やや多い	やや少ない	少ない	非常に少ない
1. 中の良い友達ができ	1	2	3	4	5	
2. 活動そのものが楽しめた	1	2	3	4	5	
3. 人に対して思いやる心が深まった	1	2	3	4	5	
4. 活動を通じて喜びや感動を経験した	1	2	3	4	5	
5. 対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強に なっている	1	2	3	4	5	
6. 必要とされていることが実感でき自信につながった	1	2	3	4	5	
7. やりがいが生まれた	1	2	3	4	5	
8. 対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた	1	2	3	4	5	
9. 気持ちの充足感が生まれた	1	2	3	4	5	
10. 「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた	1	2	3	4	5	
11. 活動が生活の中で重要な部分となり、自分のものとなった	1	2	3	4	5	
12. 新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった	1	2	3	4	5	

	非常に多い	多い	やや多い	やや少ない	少ない	非常に少ない
13. 自分ができることで社会と関わり、人の役に立つことができた	1	2	3	4	5	
14. 対象者の幸福・安楽のための新たな目標ができた	1	2	3	4	5	
15. 人や地域に貢献しようという気持ちが生じた	1	2	3	4	5	
16. 日常生活の中で人との知恵が好ましい方向に変わった	1	2	3	4	5	

問2. あなたの健康状態は？ (あてはまる番号1つに○をつけて下さい)

- | | |
|----------|------------|
| 1. 非常に良い | 4. あまり良くない |
| 2. とても良い | 5. 良くない |
| 3. 良い | |

問3. 現在関わられているグループ活動におけるあなたの状況についてうかがいます。次の(1)から(6)の項目について、あなたはグループのメンバーから、どのくらい支援を受けていると思いますか。あてはまる番号に○をしてください。

- (1) グループの仲間、あなたの心配ごとや悩みごとをどれくらい聞いてくれますか。
- | | | | | |
|----------|-------|---------|--------|-------|
| 1. とてもよく | 2. よく | 3. まあまあ | 4. あまり | 5. 全く |
|----------|-------|---------|--------|-------|
- (2) グループの仲間は、どのくらいあなたに気を配ったり、思いやりを示してくれたりしますか。
- | | | | | |
|----------|-------|---------|--------|-------|
| 1. とてもよく | 2. よく | 3. まあまあ | 4. あまり | 5. 全く |
|----------|-------|---------|--------|-------|
- (3) あなたは、グループの仲間の心配ごとや困りごとを、どのくらい聞いてあげますか。
- | | | | | |
|----------|-------|---------|--------|-------|
| 1. とてもよく | 2. よく | 3. まあまあ | 4. あまり | 5. 全く |
|----------|-------|---------|--------|-------|
- (4) あなたは、グループの仲間につらいことがあったとき、どのくらい、励ましたり、慰めたりしてあげますか。
- | | | | | |
|----------|-------|---------|--------|-------|
| 1. とてもよく | 2. よく | 3. まあまあ | 4. あまり | 5. 全く |
|----------|-------|---------|--------|-------|
- (5) グループの仲間が、あなたをいらいらさせたり、怒らせたりすることはどのくらいありますか。
- | | | | | |
|--------|---------|---------|--------|-------|
| 1. いつも | 2. だいたい | 3. ときどき | 4. あまり | 5. 全く |
|--------|---------|---------|--------|-------|

⑤グループの仲間が、あなたに世話をやきすぎたり余計なお世話をすることはどのくらいありますか。

1. いつも 2. だいたい 3. ときどき 4. あまり 5. 全く

問4. あなたの現在の活動状況についておうかがいします。

(1). 自分の体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または 今までと同じように活動することが難しい状況ですか。

1. はい 2. いいえ

問5へ

(2). 現在、あなたのグループの仲間は、あなたが活動を続けられるようにするためにどのくらい声をかけたり、気を配ったりしてくれていますか。

1. とてもよく 2. よく 3. まあまあ 4. あまり 5. 全く

問5. あなたが活動しているグループについておうかがいします。

(1). 現在、あなたのグループの仲間に体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または 今までと同じように活動することが難しい状況の人はいいますか。

1. いる 2. いない

問6へ

(2). あなたは、その人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたり、気を配ったりしていますか。

1. とてもよく 2. よく 3. まあまあ 4. あまり 5. 全く

問6. あなたの日常生活においてグループの活動はどの程度、楽しみになっていますか。

1. かなりの楽しみになっている 2. まあまあ楽しみになっている 3. どちらともいえない 4. あまり楽しみになっていない 5. 全く楽しみになっていない

問7. あなたの日常生活において、グループ活動にどの程度、心理的な負担を感じますか。

1. かなりの負担 2. まあまあ負担 3. あまり負担ではない 4. 全く負担ではない

問8. あなたの日常生活において、グループ活動にどの程度、身体的な負担を感じますか。

1. かなりの負担 2. まあまあ負担 3. あまり負担ではない 4. 全く負担ではない

問9. あと、どれくらいグループの活動を続けられると思えますか？

あと 年くらい

問10. あなたは今後、どの程度までグループ活動を続けたいですか。

	非常に思っています	そう思う	どちらでもない	それほど思いません	全く思いません
(1) グループの仲間に活動参加への住いや、スケジュールの確認をサポートしてもらい、できる限りの活動を続けたい	1	2	3	4	5
(2) 活動内容を工夫して活動を続けたい	1	2	3	4	5
(3) 活動頻度を減らして、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(4) 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を続けたい	1	2	3	4	5
(5) 定例会、例会などだけでも参加したい	1	2	3	4	5
(6) 活動場所や機会を増やして、活動を続けたい	0	2	3	4	5

問1 1. あなたが活動を続ける中で、以下のような状況になった場合を想定して、お答えください。

(1) 忙しい原因、あなたが体調不良や家族の介護などで、今までと同じように活動することが困難になったとき、活動を続けられるようにあなたの活動グループの仲間からの支援を望みますか。

- | | |
|--------------|------------|
| 1. とても望む | 4. あまり望まない |
| 2. まあまあ望む | 5. 全く望まない |
| 3. どちらともいえない | |

その理由

(2) 忙しい原因、あなたが体調不良や家族の介護などで、今までと同じように活動することが困難になったとき、活動グループの仲間は、あなたが活動を続けられるように助けられると思いますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 非常にそう思う | 4. そう思わない |
| 2. そう思う | 5. 全くそう思わない |
| 3. どちらでもない | |

その理由

(3) 忙しい原因、あなたの活動グループの仲間に体調不良や家族の介護などで活動を休みがち、または今までと同じように活動を行うことが困難な人がいたとき、あなたはその人が活動を続けるために、どのくらい声をかけたり気配りしてあげたいと思いますか。

- | | |
|----------|--------|
| 1. とてもよく | 4. あまり |
| 2. よく | 5. 全く |
| 3. まあまあ | |

その理由

問2 2. あなたが活動を続けたい理由や動機はなんでしょうか。それぞれ、あてはまる番号1から6をつけて下さい。活動の性質上該当しない項目は、「該当しない」をお選び下さい。

	健康にやむを得ず	その思い	心にかかっている	その思いが強い	全くその思いが強い	熱中している
(1). 豊かなり楽しんだりできる	1	2	3	4	5	6
(2). 人はお互いに助けあうのはならず、自分にもその義務がある	1	2	3	4	5	6
(3). 自分の持っている知識、技術を使う練習になる	1	2	3	4	5	6
(4). 余暇が有効に使える	1	2	3	4	5	6
(5). 人に喜んでもらえる	1	2	3	4	5	6
(6). 自己を再発見し、成長させることができる	1	2	3	4	5	6
(7). 社会の一員として当然のことだ	1	2	3	4	5	6
(8). 毎日の生活に充実感がある	1	2	3	4	5	6
(9). 人や社会の役に立てる	1	2	3	4	5	6
(10). 自分の生活や将来にボランティア活動を通じての経験が生かせる	1	2	3	4	5	6
(11). 友人を得ることが出来る	1	2	3	4	5	6
(12). 自分の知識、経験、技術をいかすことができる	1	2	3	4	5	6
(13). 他のボランティアと楽しく活動できる	1	2	3	4	5	6
(14). ボランティア仲間から受けてもらえる	1	2	3	4	5	6
(15). 活動を通じて精神的に社会参加できる	1	2	3	4	5	6
(16). 子どもたちとふれあえる	1	2	3	4	5	6
(17). 子どもたちの成長に役立てる	1	2	3	4	5	6
(18). 活動先への責任・使命感を感じる	1	2	3	4	5	6
(19). 現在の自分の体力や状態に合わせた活動ができる	1	2	3	4	5	6
(20). 自分の健康（体力や物忘れなど）の維持に役立つ	1	2	3	4	5	6

問13. 全体のことについておうかがいします。

(1). 体調不良や家族の介護などで休みがち または今までと同じように活動することが困難になったメンバーがいたとき、あなたのグループはそのような人が活動を続けやすい雰囲気があると思いますか。

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 非常にそう思う | 4. そう思わない |
| 2. そう思う | 5. 全くそう思わない |
| 3. どちらでもない | |

(2). 体調不良や家族の介護などで休みがち または今までと同じように活動することが困難になった会員がいたとき、各会員はそのような人が活動を続けられるように、どの程度支援するべきだと思いますか。

	非常にそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
(1). グループの仲間が活動場所への主催や、スケジュールの確認をサポートするなどにより、できる限りの活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(2). 活動内容を工夫してできるだけ活動を続けられるように支援すべき	1	2	3	4	5
(3). 活動頻度を減らして活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(4). 現在の活動レベルを維持できている間だけ、活動を継続できるように支援すべき	1	2	3	4	5
(5). 定例会の参加だけでも助めるべき	1	2	3	4	5
(6). 特に何の支援もする必要はない	1	2	3	4	5

問14. 各回の講座についてお聞きします。該当するものに○をして下さい。

	非常にそう思う	そう思う	どちらでもない	そう思わない	全くそう思わない
第1回の講座の内容について理解できた。	1	2	3	4	5
第1回の講座の内容は興味深かった。	1	2	3	4	5
第2回の講座の内容について理解できた。	1	2	3	4	5
第2回の講座の内容は興味深かった。	1	2	3	4	5
第3回の講座の内容について理解できた。	1	2	3	4	5
第3回の講座の内容は興味深かった。	1	2	3	4	5

問14. 皆さんの質問にお答えいただき、誠にありがとうございました。差し支えなければ、講座全体についてのご意見・ご感想を自由にお願いします。

[]

ご協力ありがとうございました。

巻末資料 2

世代間交流評価チェックリスト完成版

平成24年度文部科学省委託事業「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究

世代間交流評価チェックリスト (児童用)

平成 25 年 3 月

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
東京都健康長寿医療センター研究所（東京都老人総合研究所）
社会参加と地域保健研究チーム

世代間交流評価チェックリスト(児童用)

1. 背景

今日の少子高齢化を背景にして、全国的に世代間交流型の事業に注目が集まっており、実際にその件数も増加傾向にあります。一方で、現場では世代間交流事業が進んでいない上に、その評価自体も行われていない現状があります。世代間交流研究者の Kaplan 氏は、世代間交流事業における「世代間関与の深さ」の重要性を指摘しており、世代間の接触が「深く」なるにつれて事業参加者に恩恵をもたらすとしています。本研究チームでは、現場の先生、スタッフの方々が簡便かつ負担が少なく使用でき、「世代間関与の深さ」を科学的に評価するためのツール(チェックリスト)世代間交流評価チェックリストの開発を行いました。

2. チェックリストの対象となる事業

このチェックリストは、教育支援を目的とした小学生向けの世代間交流事業を対象としております。項目の中には、世代間交流事業の目的や内容に過ぎない項目がある可能性もあります。本チェックリストを使用する前に、実施予定の世代間交流事業に適したものであるか十分な検討を行ってください。

3. チェックリストから分かること

このチェックリストは、行動観察調査から明らかになった「親密な世代間交流を通して向上が見られた子どもの会話スキルやポジティブな態度」をもとに作成されております。本チェックリストに記載されている会話や態度がよく見られるほど、その世代間交流はより親密である(世代間関与が深い)ことを意味しております。逆に言う、これらの会話・態度が見られない場合には、その交流事業に何らかの問題や改善すべき点がある可能性を示唆しています。よって、本チェックリストからは、①世代間交流事業の評価、②世代間交流事業の改善点の抽出、をすることができます。

4. 使用の手順

このチェックリストは、世代間交流事業を運営する先生やスタッフが使用することを想定して作成されております。「Ⅰ. 会話チェックリスト」では、世代間交流を通じた児童の高齢者に対する会話の親密さ、「Ⅱ. 態度チェックリスト」では、世代間交流を通じた児童の高齢者に対する態度の親密さがそれぞれ評価されます。書かれているそれぞれの項目を読んで、その項目が事業全体を通してどの程度当てはまるのか、「まったくなかった」から「よくあった」まで最も当てはまる項目の□にチェックを入れてください。続いて、回答項目の()内に記入されている得点を和して合計得点を算出してください。算出した合計得点をもとに、世代間交流事業の判定を参照してください。

○ それぞれの項目の得点を決める際に、以下のことを考慮してください。

- (1) 児童個人の評価ではなく、事業に参加している児童全体の評価をしてください。
(例えば、参加者全体の評価、クラス全体の評価)
- (2) その行動・会話などの程度の頻度で起きるのかを評価してください。
(例えば、数分に1回か、数時間に1回か)
- (3) その行動・会話などの程度世代間交流を促進させているのかを評価してください。
(例えば、高齢者とのコミュニケーションが成立していたか、成立していなかったか)

6. チェックリストの記入

●あなたが参加した世代間交流事業について、各質問について最も当てはまる項目の□に✓ を付けてください。

Ⅰ. 会話チェックリスト					
1	児童は、みずから進んで高齢者にあいさつをしていた。	<input type="checkbox"/> まったくなかった (0点)	<input type="checkbox"/> あまりなかった (1点)	<input type="checkbox"/> 少しあった (2点)	<input type="checkbox"/> よくあった (3点)
2	児童は、みずから進んで高齢者に話しかけていた。	<input type="checkbox"/> まったくなかった (0点)	<input type="checkbox"/> あまりなかった (1点)	<input type="checkbox"/> 少しあった (2点)	<input type="checkbox"/> よくあった (3点)
3	児童は、丁寧な言葉使いをしていた。	<input type="checkbox"/> まったくなかった (0点)	<input type="checkbox"/> あまりなかった (1点)	<input type="checkbox"/> 少しあった (2点)	<input type="checkbox"/> よくあった (3点)
4	児童は、高齢者からの問いかけに回答していた。	<input type="checkbox"/> まったくなかった (0点)	<input type="checkbox"/> あまりなかった (1点)	<input type="checkbox"/> 少しあった (2点)	<input type="checkbox"/> よくあった (3点)
Ⅱ. 態度チェックリスト					
1	児童は、高齢者の身体を気づかう態度が見られた(席を譲る、大きな声で話す、ゆっくり話す等)	<input type="checkbox"/> まったくなかった (0点)	<input type="checkbox"/> あまりなかった (1点)	<input type="checkbox"/> 少しあった (2点)	<input type="checkbox"/> よくあった (3点)
2	児童は、高齢者の話を耳を傾けていた。	<input type="checkbox"/> まったくなかった (0点)	<input type="checkbox"/> あまりなかった (1点)	<input type="checkbox"/> 少しあった (2点)	<input type="checkbox"/> よくあった (3点)
3	児童から高齢者に近寄っていた。	<input type="checkbox"/> まったくなかった (0点)	<input type="checkbox"/> あまりなかった (1点)	<input type="checkbox"/> 少しあった (2点)	<input type="checkbox"/> よくあった (3点)
4	児童は、活動に集中して取り組んでいた(活動内容に興味や関心を持って取り組んでいた)	<input type="checkbox"/> まったくなかった (0点)	<input type="checkbox"/> あまりなかった (1点)	<input type="checkbox"/> 少しあった (2点)	<input type="checkbox"/> よくあった (3点)

7. 総合判定

あなたの世代間交流事業評価得点は:

$$\begin{matrix} \text{I} & + & \text{II} & = & \text{合計得点} \\ \square & + & \square & = & \square \\ (0\sim 12\text{点}) & & (0\sim 12\text{点}) & & (0\sim 24\text{点}) \end{matrix}$$

判定	点数	交流の親密度	改善する必要あり	
	0～4点	とても低いと考えられる		改善する必要あり
	5点～15点	やや低いと考えられる		
	16点～21点	やや高いと考えられる		改善する必要なし
22点以上	とても高いと考えられる			

8. 世代間交流事業の評価

あなたの世代間交流事業の評価はいかがでしたか？このチェックリストでは、世代間交流の視点から、行動観察調査の結果などに基づいて、「世代間交流の親密さ」を判定できます。評価得点が0～12では、世代間交流を通じた親密さは低い可能性があり、世代間交流事業の改善が必要になります。【参考】に掲載されている「世代間交流事業の改善点」を参照して、次回に世代間交流事業を行う際の改善をおこなってください。世代間交流事業を再検討する際は、個人のみでの評価だけでなく、複数の職員・スタッフ間の評価を考慮した上で、課題と改善点を検討してください。世代間交流事業の目的や地域性にに応じて過ぎない項目がある可能性もあります。

【参考】世代間交流事業の改善に向けて

世代間交流事業の改善には、各段階(事業前、事業中、事業後)において事業の目的、対象、人数、内容等を検討する必要があります。「世代間交流事業の改善点」を下記の表に示しますので参考にしてください。

【世代間交流事業の改善点】

世代間交流事業前に確認すること:

【内容】

- ① 事業の計画段階で、いろいろな人に意見を求める。
- ② 事業の目的は、明確になっている。

【場所・人数】

- ③ 事業の参加者数は、事業内容に適した人数である。
- ④ 事業が開催された場所は、活動に適した広さである。
- ⑤ 事業が開催された場所は、子ども/高齢者が安全に活動できるように配慮がされている。

【スタッフの準備】

- ⑥ 参加者が開催場所へアクセスしやすいように工夫している。(駐輪場・駐車場の確保、案内板の設置など)
- ⑦ 事業のスタッフは、「高齢者」と「子ども」について、十分理解している。
- ⑧ スタッフ間の連絡は、スムーズにいくようになっている。
- ⑨ 同じ世代同士が固まらないような工夫をしている。

世代間交流事業中に確認すること

- ⑩ 子どもと高齢者の参加者は、それぞれが事業の内容に関心を持って取り組んでいる。
- ⑪ 事業では、子どもが高齢者に感謝する様子が見られる。
- ⑫ 事業の中で、高齢者と子どもが自然に話をする様子が見られる。

本報告書は、平成 24 年度文部科学省委託事業「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究により制作しました。

平成 24 年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における
実証的共同研究調査報告書

平成 25 年 3 月

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター
東京都健康長寿医療センター研究所
社会参加と地域保健研究チーム
野中久美子、村山陽、倉岡正高、藤原佳典、